

新修總持寺史

鶴見大学仏教文化研究所顧問 納富 常天

まえがき

まず烏滸がましく執筆するに至った動機・経緯について述べる。平成元年四月、鶴見大学奉職を機会に、總持寺関係の研究を志したが、金沢文庫在任中から進めていた『金沢文庫資料の研究 稀覯資料篇』（法蔵館）の出版と差し合い、思うように捗らなかつた。七年七月に出版することができたので、本格的に取り組みたいと考えていた矢先、同年は總持寺学園創立七十周年に相当し、その記念事業の一環として、鶴見大学の研究機関「鶴見大学仏教文化研究所」が設立されるという思いもよらぬ幸運に恵まれた。研究所の研究目的はいくつか揚げられているが、總持寺史や總持寺教団史の解明は基本的なもので、極めて重要なものだった。

研究所主任として、その目的を達成するためには、高崎直道所長（鶴見大学・短期大学学長）と計り、基礎資料である『總持寺住山記』をはじめとする中世から近代までの總持寺関係資料、さらには永光寺（石川県羽咋市）関係資料の総括的研究が必須であつた。また研究を推進するためには、可能な限りの資料収集が急務であつた。早速大本山總持寺および永光寺の御許可を得て、駒澤大学図書館保管の『總持寺住山記』『五院輪住帳』、および石川県立図書館史料編纂室蔵永光寺関係資料のマイクロフィルムにより写真本を作成した。なかでも『總持寺住山記』は重要であるから、保存用と研究用の二部を作つた。しかし『總持寺住山記』巻一は写真撮影時の不手際によってか、写真本では判読できない箇所があるのみならず、落款も不鮮明であつたから、總持寺の御了解を得て、『鶴見大学仏教文化研究

所紀要』第四号（平成十一年四月）に活字化した。

また總持寺（横浜市）・永光寺（石川県羽咋市）・門前町（石川県門前町）の史料調査に参加し、「資料調査報告書」（總持寺・永光寺）『新修門前町史』の刊行にも関与した。また「江戸末期における總持寺の実情」（一）文化三年の火災と再建を中心として（二）『安政六年諸般書上』を中心として（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第九・十号）『瑩山禪師と曹洞宗教団の發展』（總和会宮城県支部）「大本山總持寺〈古文書の世界〉」（『曹洞宗報』平成二十一年一月号以降三十六回）『總持寺と曹洞宗の發展—鶴見御移転百周年に因んで—』（總和会宮城県支部）〔總持寺所藏重要文化財〕『瑩山紹瑾像について』（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第二十二号）、その他鶴見御移転関係などを発表し、二十二年には懸案の『總持寺住山記』、二十八年には『總持寺五院輪住帳』を總持寺から出版して頂いた。

また平成十二年鶴見大学退職後は總持寺宝物殿館長として二十年まで、所蔵資料の整理と調査研究、さらには関連する資料の究明に努めた。またその研究成果も随時発表した。

總持寺については栗山泰音『嶽山史論』『總持寺史』、横關了胤〔江戸時代〕『洞門政要』『總持寺誌』、總持寺祖院『曹洞宗大本山總持寺祖院』、竹内道雄『總持寺の歴史』、佃和雄『能登總持寺物語』、中島仁道『曹洞宗教団の形成とその發展—總持寺の五院体制を視点にして』、圭室文雄『總持寺祖院古文書を読み解く—近世曹洞宗教団の展開』、大本山總持寺『五院ものがたり』その他論文もいくつかあるが、鶴見大学仏教文化研究所発足以降、二十二年余重ねて来た調査研究成果からみると、これらが触れていないもの、見落したものの、誤解したもの、さらには新しく資料が発見されたものなどが、少なからずあるので、来たる平成三十六年の瑩山禪師七百回大遠忌を期して、改めて筆を取った次第である。

なお瑩山禪師の生誕年は、従来寺伝で文永五年（一二六八）とされており、これを踏襲して来たが、平成二十八年、開祖瑩山禪師七百回忌・二祖峨山禪師六百五十回大遠忌から文永元年（一二六四）に改められたので、本論でもこれに従うことにする。

はじめに

諸嶽山總持寺の成立については、後で詳述するが、三密修法の定賢権律師が、永代伽藍興隆のため、永光寺において正伝の仏法を宣揚していた瑩山紹瑾禪師に、諸岳寺觀音堂及び寺領・敷地を寄進したのが始まりである。いま瑩山禪師の行実や、その法嗣で長嫡の明峰素哲禪師とともに二神足とされ、四十二年の永きにわたり總持寺の全国的展開の基礎を築いた峨山韶碩禪師の生涯を通じ、總持寺の成立および輪番住持制や五院の成立による全国的展開、さらには伽藍の造営・整備、寺領など近代までの変遷を順次述べることにする。

第一章 總持寺開山瑩山紹瑾禪師

(1) 著書・伝記資料

瑩山紹瑾禪師については栗山泰音『嶽山史論』・『總持寺史』、横關了胤『總持寺誌』、孤峰智璨『日本曹洞宗兩祖伝』、竹内道雄『總持寺の歴史』、東隆真『瑩山禪師の研究』・『太祖瑩山禪師』などがあるが、瑩山禪師についてもっとも詳細なものは『瑩山禪師の研究』である。本論でも瑩山禪師については該書に拠るところが多い。

最初に瑩山禪師の著書と伝記資料を掲げると、つぎのとおりである。

著書

伝光録 瑩山和尚清規、信心銘拈提 坐禪用心記 三根坐禪說 瑩山和尚語錄

伝記資料

自伝

洞谷記（文保二年へ一三二八）―正中二年へ一三三五）遷化直前までの記録

宗内で成立した伝記

洞谷第一祖勅諡仏慈禪師瑩山和尚行実『御開山及四哲行状略記』所収 応永五年（一三九八）雪溪安宅編

開山行状記『永光寺中興雜記』所収 寛永十九年（一六四二）久外嬖良編

洞谷第一祖勅諡仏慈禪師瑩山和尚行実『洞谷五祖行実』所収 撰者不詳

能州洞谷山永光寺瑩山紹瑾禪師『日本洞上聯燈錄』所収 享保十二年（一七二七）嶺南秀恕編

永光瑾禪師伝『月坡禪師語錄』卷之二所収 天和二年（一六八二）刊 月坡道印撰

總持寺開山仏慈禪師行実（自牛筆写本 貞享二年（一六八五）

瑩峨行実集錄（不伝式燈記 貞享五年（一六八八）

諸嶽開山瑩山仏慈禪師行実『諸嶽開山二祖禪師行錄』通幻寂靈書 元禄四年（一六九二）刊

總持寺瑩山瑾禪師伝『日域洞上諸祖伝』元禄六年（一六九三）湛元自澄撰

能州諸嶽山總持開山瑩山紹瑾大和尚『洞済当門錄』元治二年（一八六五）隆曉編

瑩山瑾禪師伝略考『瑩山和尚伝光録』安政四年（一八五七）仏州仙英 刊

二代瑩山紹瑾和尚『大乘聯芳志』

宗外で成立した伝記

總持寺瑩山瑾禪師伝『扶桑禪林僧宝伝』延宝三年（一七五七）高泉性激編

永平徹通義介禪師法嗣能州諸嶽山總持寺瑩山紹瑾世姓藤氏『延宝伝燈録』延宝六年（一六七八）卍元師蛭編

能州諸嶽山總持寺沙門紹瑾伝『本朝高僧伝』元禄十五年（一七〇二）卍元師蛭編

瑩山禪師に関する主な参考文献

常済大師全集

總持寺

日本曹洞宗兩祖伝

孤峰智璨

瑩山禪師御遺墨集

瑩山禪師奉讃刊行会編

瑩山禪（一—十二）

光地英学・松田文雄・新井勝龍

瑩山

佐橋法龍

瑩山禪師の研究

東隆真

瑩山禪師清規

東隆真

太祖瑩山禪師

東隆真

道元禪師と瑩山禪師

東隆真

城満寺

心と緑の森・創造の会

瑩山紹瑾の生涯

百瀬明治

（2）生誕・幼少時代

瑩山紹瑾（一二六四—一三三五）は文永元年（一二六四）十月八日、越前多禰^①で誕生している。多禰の場所は福井県の武生市帆山町と坂井郡九岡町の二説がある。いずれにも根拠があり結着はついていない。また大乘寺本『洞谷記』には

悲母三十七歳夢^②朝日光暖吞^③。覺後孕胎。悲母祈^④誓于此本尊云。我懷妊子為^⑤聖人。為^⑥善知識。而為^⑦人天。可^⑧有^⑨益人者。令^⑩產生平安。不然者。觀音。以^⑪威身力。胎内而可^⑫令^⑬朽失。祈誓而毎日作^⑭一千三百三十三拜。讀^⑮誦觀音經。而至^⑯七箇月。而安安行行生下。産處者越前国多禰。觀音堂之敷地也^⑰。

とある。また『本朝高僧伝』には母が

夢^レ吞^二朝日^一有^レ孕。自^レ此毎日礼^二觀音像^一三百三十回。誦^二普門品^一三十三卷。持^二胎中為^二奇男^一也。及^レ生顏範異^レ常^⑤とあるように、母が朝日を吞む夢をみて身籠り、それ以降毎日一生頂戴の本尊である觀音像を三千三百三十三回、あるいは三百三十回礼拝し、觀音經または觀音經普門品を誦誦して、大善知識として人天を利益するよう持っている。三十七歳という高齢出産のため難産だったらしく、産所に赴く途中に生れたので「行生」と名づけられたとある。これは『觀音堂縁起』（重要文化財）の文中に、總持寺の寺額を正中二年（一三二四）藤原行房卿に手紙で依頼したとあるが、それに本願は創始者行基、中興は行生、額の書は行房、まさに三つの縁（行）はすでに和合しているから、あらゆる事は必ず成就するであろうと記している。あるいは別名かも知れないが、行生は幼名であったことは確かである。

つぎに幼少時代については『洞谷記』に「予若年之時瞋恚過^⑥人」とあるが、瀧谷琢宗『總持開山太祖略伝』にはつぎのようにある。繁を厭わず掲げると

文永九年。国師年五。

資性穎敏、生れながらにして能く知る。誠に凡人に非ず。然れば平生の遊戲にも石を積みて宝塔に比し、或は土を団めて仏像に擬し、又よく母に順ふて普門品を誦するなど、自ら仏事をなすをこよなき樂みとなし、終に尋常の兒童に交はりたまはず。然りながら意は甚だ下急にして輕疎の振舞あり、輒もすれば瞋り腹立ち、異しきまでに狂ひ叫びて、自ら傷ることさへ数々なれば、父母の歎きは大方ならず。種々に医薬をも尽せしが、更に其の詮あらざれば、益々悲歎に堪へずして（中略）多彌の觀音に祈誓をこらして謂く。（中略）唯願くは大悲哀愍この業病を痊しめ玉へと、日夜丹誠おたらざりしが、奇むべし国師の瞋恕これより倏ち和らぎて、事に触れ縁に対して溫柔なること、恰も猶ほ生を替しが如くなりし。

とある。これらによつて禪師は普通の兒童に比し、ひときわ聡明であつたが、非常に短氣な性格であつた。しかし父母による多欄の觀音に対する祈誓により生れ替つたようになった。

(3) 出家と道号・法諱

前に述べたように、禪師は父母が觀音に祈誓し、大善知識として人天を利益すべく誕生したが、生れながらにして資性穎敏であるのみならず、石を積んで宝塔に比し、土を団めて仏像に擬するなど、仏事を好んだが、出家およびそれ以降について『洞谷記』につきぎにある。

八歳而剃髮。参_二永平当住。義介和尚会_一。十三歳而作_レ僧。為_二永平二代。先住_二辨和尚。末後小師_一。十八歳。発心求道。十九歳而参_二寂円塔主_一。発_二菩提心_一。至_二不退転位_一。廿二歳而聞声悟道、廿五歳而如_二觀音_一。発_二大悲闡提之弘誓願_一。廿八歳而充_二阿州海部。城万寺住持_一。廿九歳而就_二永平寺演老_一。許_二可受戒作法_一。即年冬。始開_二戒法_一。最初度_二五人_一。至_二卅一歳_一。度_二七十余人_一。卅二歳而参_二得加州大乘開山介和尚宗旨_一、嗣法為_二長嫡_一。為_二大乘最初半坐_一。得_二分食分院佳名_一。得_二超師氣概証明_一。卅三歳而所_レ行_二立僧入室_一。卅五歳。登_二大乘全座_一。補_二任二代住持職_一。十五年接化。移_二当山_一。為_二開山_一。自_二証果_一已來。五百生來。興法利生之現身也。⁷⁾

これによると、文永八年（一二七一）、八歳で剃髮し、永平寺三代住持職の徹通義介（一二一九—一三〇九）の会下に参じて、十三歳（建治二年一二七六）、永平寺二代孤雲懷辨（一一九八—一二八〇）の最後の小師（弟子）となつたこと、十八歳で発心求道し、十九歳で寂円に参学したことがわかる。しかし禪師の法諱・道号は誰れが安名したか明らかでない。ただわずかに『洞上伝燈講式』に

投_二徹通_一祖_二於永平_一祝髮_シ玉_フ。時年八歳_{ナリ}也。法諱ハ紹瑾。号ヲ曰_フ瑩山_ト。表_{スル}其_ノ有_二美玉ノ璨爛_トシテ

含^ム光^ヲ之氣稟^一者ノカ^カ歟。

とあり、徹通義介が匿名したとしている。法諱紹瑾の匿名は本師義介であることは間違いないが、道号瑩山はあるいは最後の小師となつた懷牂かも知れない。このように瑩山紹瑾という四字連称について、東隆真『瑩山禪師の研究』（四十八頁）において「日本曹洞宗で、称呼に法諱と道号との四字をもちいるのは、おそらく禪師が始まりであるらしく、それ以前は、道元、懷牂、義介のように法諱二字だけであつた」としている。しかし懷牂・義介は孤雲懷牂、徹通義介と呼称しているように、道号がある。この道号の成立については、玉村竹二『五山禪僧伝記集成』に詳しい。

ここで瑩山紹瑾禪師の道号・法諱について考察してみたい。道号については管見する限り、高橋秀栄「瑩山禪師の道号の発音について（『宗学研究』36号、平成六年）があるのみであるが、字体については触れていない。また法諱の「瑾」についての考察はない。この道号・法諱については、平成二十三年十二月『宗報』「大本山總持寺宝物殿古文書の世界」や、『開山瑩山紹瑾禪師七〇〇回一祖峰山韶嶺禪師六五〇回二遠忌記念 禪の心と私たち——總持寺の至宝——」などでも触れたが、道号瑩山の「瑩」の字体（表記）と字音、法諱の紹瑾の「瑾」の字体について改めて考察する。まず「瑩」の字体は、従来玉の上が「ㄣ」（わかんむり）の「瑩」になつてゐる。しかし詳細に観察すると、親筆はすべて「ㄣ」（うかんむり）の「瑩」になつてゐる。それは大本山總持寺蔵『観音堂縁起』（重要文化財）の署名、および「示性禪姉公」の署名・落款（朱印）をはじめとして、永光寺蔵「洞谷山尽未来際置文」（重要文化財）「当山条々尽未来際可勤行事」「洞谷山四至堺田畠注文」の署名などからわかる。

一般に「瑩」は諸橋徹次『大漢和辞典』をはじめ、通用の漢和辞典は管見する限り、玉の上は「ㄣ」（わかんむり）になつてゐる。「ㄣ」（うかんむり）の「瑩」は禪師独自のものだつたらうか。古辞書の『倭名類聚鈔』や、字体・字音・和訓などを注記した『類聚名義抄』など、いろいろ渉獵したところ、平安末期の実用通行語を伊・呂・波四十七部に分類した辞書『色葉字類抄』（黒川本下六四ウ六五才）の「御^ミ」の項の辞字およびその索引（七六八頁）に「ケイ」

と読む「ㇿ」（うかんむり）の「瑩」がある。また同じく菅原為長（一一五八—一二四六）により平安末期に成立したとされる寛元本（一二四三—〇六写）『字鏡集』巻五に、『大漢和辞典』などと同じ字体の「ㇿ」（わかんむり）の「ケイ」と読む「瑩」があるから、少なくとも平安末期から鎌倉時代には共に通用していたことがわかる。このうち瑩山禪師は『色葉字類抄』の「ㇿ」（うかんむり）の「瑩」を使用したと思われる。しかし『観音堂縁起』の署名と、「当山条々尽未来際可勤行事」の文中にある「瑩山一期中為時料」の「瑩」は「ㇿ」（うかんむり）の下が「玉」ではなく「王」になっている。

また總持寺藏正中元年（一二三四）三月十六日「当寺十箇条之龜鏡」（後年書写か）や、『總持寺住山記』（總持寺第七十二世春谷宗範が永享二年（一四三〇）十一月十九日から翌三年二月十二日までの住山中に、何等かの事情があったらしく巻首から七十一世惟忠勤和尚まで書き改めたもの、永光寺藏明応十年（一五〇一）および文龜三年（一五〇三）書写の『能州洞谷山永光禪寺行事次序』（『瑩山和尚清規』）は「ㇿ」（わかんむり）の「瑩」になっているから、はやくから『字鏡集』の「ㇿ」（わかんむり）の「瑩」も通用されていた。今後『色葉字類抄』と『字鏡集』の関係、および瑩山禪師が『色葉字類抄』の「瑩」によられた因由などを究明する必要がある。

また法諱の「瑾」の字体は、あるいは瑩山禪師の書き癖かとも思われるが、前にも触れた『観音堂縁起』や、『洞谷山尽未来際置文』・「洞谷山四至堺田畠注文」さらには大乗寺（金沢市）藏「素哲僧^{そとく}禄状」「洞谷山讓状」（共に重要文化財）など親筆は一見してわかるように、「瑾」の旁（つくり）が上から順に「サ」（くさかんむり）「一」「口」とあり、その下が「土」の俗字「土」を書く「瑾」になっている。これは最澄の「山家学生式」における「照千・一隅」（照于一隅＝一隅を照らす）のように、置字「于」の字体を「千」に、また道元禪師の永平寺藏『普勸坐禪儀』の「撰」「拂拭」「擬」や、鶴見大学藏『対大己五夏闍梨法』断簡の「指揮」などにおける「扌」（手）偏を「オ」に表記されているのと、あるいは軌を同じくするものといえるだろうか。このように瑩山紹瑾禪師における「瑩」と「瑾」は親筆

か否かを決定する一つの大きなカギと考えてよい。^⑨

つぎに字音については、従来何の疑問もなく、宗門をはじめとして使用されて来た「ㄱ」(わかんむり)の「螢」の字は、東隆真『瑩山禪師の研究』では「螢はエイ、ヨウと読むが、宗門ではケイと読んでいる」と簡単に述べているが、前掲の高橋秀栄論文にもあるように、『大漢和辞典』や、一般に流布しているいずれの漢和辞典も字音は「エイ」や「ヤウ」「ヨウ」とあり、決して「ケイ」とは読んでいない。ただ類字の「螢」^ㄱ「榮」^ㄱ「榮」^ㄱ「螢」などは「ケイ」と読んでいる。また『仏教語大辞典』「ケ」の項には「螢」を掲げているが、「螢けい↓よう」とある。この「螢」を「ケイ」と読む問題については、先学によつてもいろいろ説明されているので紹介してみる。

まず面山瑞芳(一六八三—一七六九)の『大智禪師偈頌聞解』巻中は

コノ螢ノ字ハ、榮ノ音ニモ螢ノ音ニモナル、エトケトハ相通ズル、悉曇ノ定リナリ、ソレヲアル濟家坊ガ、洞家ノモノハ文盲ナ、我ガ祖師ノ号ダニヨミ羊ヲシラヌ、瑩山^{エイ}瑩山^{ケイ}ト唱ユルト云タトテ、ソレヲ聞タ洞下ノ人ガ、実ニ思フテ四百年誤タ、向後ハエイ山ト云ガヨヒト云フタト、来テ告タモノガアル、コレハ一盲衆盲トハコノ羊ナコト、ユヘニ委細ニ云ベシ、^{ケイ}ノ字ガ涓熒切、音^{ケイ}扁トテ林ノ外ヲ^{ケイ}ト云フ、字ノ形ヲ三方ニ垣セシ羊ニ作ル、ソコニ火ヲニツナラバタユヘニ他方ニヨク見ユルガ螢ナリ、下ニ虫ヲカキテ螢ニシタモ、外ニイヨイヨ見ユルナリ、下ニ木ヲカキテ榮ニシタモ、遠クヨリ見ユルナリ、下ニ玉ヲカキテ螢ニシタモ、ヒカリガヨク見ユルココロ、エケセテネノ相通ニテ、文字ニコノ例多シ、

とあり、「螢」を「ケイ」と読んでいる。

また『平仄辞典』「エノ部」に「螢」があり、「エイ別ケイ」、「ケノ部」にも「螢」があり、「ケイ本エイ」とあつて、「ケイ」と読んでいることがわかる。

また前掲の高橋論文には『摩訶止観』巻五にある「螢練」を岩波文庫本は「ケイレン」と読んでおり、金沢文庫本

『法華文句私見聞』巻十（延慶三年へ一三二〇）心慶手沢本にある「熏瑩」の右に「クンケイス」、左に「クンシミカク」と字音と字義があり、『金剛頂蓮華部心念誦次第』（大治五年へ一三三〇）の本奥書）の文中にある「磨瑩」に「マケイセシム」と振仮名があると論じているが、そのほかにも東大寺凝然（一二四〇—一三二二）の門流で、華嚴・戒律の学匠湛睿（一二七一—一三四六）の唱導資料『田中草 箇奉納表白慧父』にも「宝曇映シテ目ニ清瑩セイケイタリ」とある。

なお字義については、先述した『色葉字類抄』『御ミ』項の辞字に「ム」（うかんむり）の「瑩」があり、右側に「ゲイ」、左側に「エイ」と振り仮名があり、下に「ミカク」とある。また寛元本『字鏡集』巻五には「ム」（わかんむり）の「瑩」があり、右側に「エイ」、下に「又音螢」「ミカク」とあり、「ケイ」とも読み、また「ミカク」と字義もある。このように「ム」（うかんむり）の「瑩」も、「ム」（わかんむり）の「瑩」もともに「ケイ」と読んでいるから、少なくとも平安末期以降一般に「ケイ」と読まれていたことは間違いない。また字義はいずれも「ミカク」である。

（4）諸方遍参

つぎに諸方遍参であるが、これは後述する本師徹通義介禪師とともに、瑩山禪師の宗教思想形成や人間形成に大きな影響を与えている。諸方遍参については『日本洞上聯燈録』や『總持開山太祖略伝』によると、弘安八年（一二八五）遍参の途にのぼり、越前宝慶寺寂円（一二〇七—九九）や、京都東福寺東山湛照（一二三一—九二）、白雲慧暁（一二三三—九七）、紀州興国寺無本覚心（一二〇七—九八）に投じている。中国来朝僧寂円は天童如浄禪師（一一六三—一二二八）会下で、道元禪師と同参だったが、如浄禪師示寂後、道元禪師を慕い安貞二年（一二二八、一説に元年）に来朝し、その膝下に投じた。二十五年にわたり随従し、宇治興聖寺・永平寺の承陽庵（如浄禪師塔所）の塔主であったが、余り重用されず伝法・伝戒も授与されていない。

道元禪師示寂後懷舛に参じ、心印を得て宝慶寺に移り、深山幽谷で超俗の修行に励んでいる。著書も無いから、その思想や宗風は明らかでない。しかし法嗣の永平寺第五世で永平中興の祖といわれている義雲（一二五三—一三三三）の『義雲和尚語録』によりわずかに推察せざるを得ない。その語録には洞山の三路、宏智の四借、臨済の四賓主、洞山の五位など、宋朝禪の機関（指導法）に関する説示があるから、道元禪師が批判した宋朝禪に回歸し、日本臨済宗を包容するものだったといわれている。

また東山湛照と白雲慧暁はともに東福寺開山円爾弁円（一二〇二—一八〇）の弟子であるが、東山は同じく円爾の弟子で南禅寺開山無関普門（一二二—一九一）とならび、円爾門下の双壁とされ、円爾のあと東福寺第二世になるが、一夏九旬で退院し、三聖寺（京都）開山になっている。弟子には僧伝を体系的にまとめた『元亨釈書』を著した虎関師鍊（一二七八—一三四六）がある。なお虎関の門流には五山学芸の一翼をになった文学僧が輩出している。

また白雲慧暁は文永三年（一二六六）入宋し、瑞巖寺希叟宗曇（『禅学大辞典』は曇希、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』は希叟妙曇としている）の膝下に投じた後、浙江の諸禅刹を行脚修行し帰朝したが、隱逸的であった。檀越九条家の招請により東福寺第四世に出世している。

このような東山・白雲の師円爾は園城寺で出家したが、東大寺で受戒し、栄西の弟子である上野長楽寺栄朝（？—一二四七）、鎌倉寿福寺退耕行勇（一一六三—一二四一）に参随した。その後嘉禎元年（一二三五）神子栄尊（一一九五—一二七二）とともに入宋、天童山癡絶道冲（一二六九—一二五〇）、淨慈寺笑翁妙堪（一一七七—一二四八）、靈隠寺石田法薰（一一七一—一二四五）、北山退耕德寧（生没年不詳）などに参じた後、径山の無準師範（一一七八—一二四九）に投じ印可を受け、仁治二年（一二四二）帰朝している。筑前崇福・承天寺で仏心宗を唱えたが、藤原道家（一一九三—一二五二）に招かれ東福寺開山になった。著書には『聖一国師語録』『坐禅論』『東福開山聖一国師法語』のほか、『大日経見聞』『瑜祇経見聞』など密教関係のものもあるが、『聖一国師法語』に

禪トハ仏心也、律トハ外相也、教ハ言説也、称名ハ方便也、是ラノ三昧皆仏心ヨリ出タリ、故ニ此宗ヲ根本トス。^⑩

とあり、禪が中心であつたことは確かである。『興禪護国論』を著し、禪宗四十六伝・二十四流の一つ千光派の祖とされる栄西（一一四一—一二二五）は台密十三流の一つ葉上流を形成し、『菩提心論口決』『教時義勘文』や『胎口決』などの著書があり、示寂する半年前まで密教の修法を行つてゐる。また『喫茶養生記』も密教に則つて書かれてゐることなどを考えると、円爾弁円は栄西と同じように、密教的要素の強い禅僧であつたことがわかる。

東福寺は京都五山四位に位置づけられてゐるにも拘わらず、開基が公家（九条道家）であることや、弘安三年（一二八〇）六月一日の「東福寺条々事」全八条の第四に「東福寺長老職事、円爾門徒の中、器量の人を計り、代々譲与すべき也」^⑪（原漢文）とある円爾弁円の「東福寺規式」により、五山の伝統的な十方住持制（門派に関わりなく、天下の名僧を招聘する住持制度）に則らず、聖一（円爾弁円）派の一流相承が許容されてゐた。それは一門における和合と結束をはかり、東福寺住持という名誉と、東福寺の護持と発展という責務を、一門で平等にわちあうものだった。開山円爾の後、その弟子十三人——二世東山湛照（住持期間、一夏九十日）、三世無関普門（十一年）、第四世白雲慧暁（四年）、第五世山叟慧雲（五年）、第六世藏山順空（五年）、第七世無為昭元（二年）、第八世月船琛海（四年）、第九世痴兀大慧（一年未滿？）、第十世直翁智侃（一年）、第十一世南山士雲（五年）、第十二世雙峰宗源（五年）、第十三世潛溪處謙（？）、第十四世天桂聰杲（？）——がつぎつぎに住持職に就いてゐる。第三世無関普門（一二二二—九一）の十一年を除き、一夏九旬の超短期（二世東山湛照）から五年（第四世白雲慧暁四年、第五世山叟慧雲五年など）で輪番に住持してゐる。

このような動向下にあつた東福寺東山湛照・白雲慧暁の膝下に参じた瑩山禅師は、やがて能登に永光寺（石川県羽咋市）を開き、「洞谷山尽未来際置文」（元応元年へ一三一九）十二月八日）に「当山の住持は五老の塔主なり。瑩山

の門徒中、嗣法の次第を守り、住持興行すべし」(原漢文)とあるように、永光寺の発展と一門の結束をはかり、輪番住持を規定したものと思われる。それはまた必然的に總持寺における輪番住持制に直結することはいうまでもない。なお總持寺の輪番住持制は、峨山派の拠点寺院である陸奥正法寺(岩手県水沢市)、越前竜泉寺(福井県武生市)、相模最乗寺(神奈川県南足柄市)など二十七ヶ寺も住持制度として取り入れているが、これは教団の団結と発展に大きな影響を与えたばかりか、曹洞宗教団の一大発展をとげる要因になったことは間違いない。

因みに至徳三年(一二八六)、足利義満は相国寺を開創し、五山に列するため、義堂周信(一三二五—一三八)の進言により、南禅寺を五山之上にし、相国寺を二位に列して、十方刹から夢窓派の度弟院(一流相承)にしている。また京都大徳寺(十刹)も花園上皇や後醍醐天皇の御置文で、宗峰妙超一門による一流相承になっている。(二十六世養叟宗頤へ一二七八—一四五八)が永享三年(一四三一)に幕府の干渉から逃れるため十刹を辞退)、また寂室元光(一二九〇—一三六七)の永源寺(滋賀県永源寺町)も靈仲禅英(曹源寺門派)、松靈道秀(興源寺門派)、弥天永釈(永安寺門派)、越溪秀格(退蔵寺門派)、知庵元周(永聖寺門派)の門流五派により輪番守塔している。また日蓮宗も本弟子(六老僧)日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持を中心に、十八人によって身延久遠寺(山梨県身延町)にある日蓮の塔を月番で守っている。

つぎに無本覚心は高野山伝法院覚仏に密教を習学し、金剛三昧院退耕行勇に参じ、道元禅師に菩薩戒を受けている。また栄西の弟子釈円栄朝(？—一二四七)、その弟子の蔵叟朗誉(一一九四—一二七七)、さらには渡海入宋僧天祐思順(生没年不詳、北礪居簡へ一一六四—一二四六)に参じ、侍局に居して印可を受く。在宋十三年、帰朝後洛東に勝林寺を開創)に参じている。また天祐思順の膝下にあつたとき、その影響もあつたか、渡海の念に駆られたらしい。円爾弁円の紹介状をもって、円爾以来道筋ができていた無準師範を尋ねている。しかし無準はすでに没していたので、やむなく無門慧開(一一八三—一二六〇)に参じ得法している。無門には『碧巖録』や『従容録』とともに公案

集として有名な『無門関』があるが、帰朝にあたり将来している。

無本覚心には『法燈国師坐禅論』や『法燈国師法語』などがあるが、『法燈国師法語』に「諸法ノ中ニ禅門最トモ勝レタリ。仏心宗ナル力故ニ。諸行ノ中ニ坐禅最トモ勝レタリ。大安樂ノ行ナル力故ニ」とあるように、禅や坐禅を最勝としている。

また一方では正応五年（一二九二）四月五日、「住侶堅可守禁戒事」として「誓度院条々規式」を定めている⁽¹⁴⁾。誓度院は紀の川沿いにある粉河寺（粉河観音宗本山）の子院である。この規式は『興国寺文書』（東大史料編纂所）中であつて、八条からなり、禅院と同じように三時勤行・四時坐禅をあげると同時に、三時勤行には仏眼・愛染王・五大尊・薬師法などの真言を誦することになっており、四時坐禅にも千手法・不動法・愛染法などの真言行法を規定している⁽¹⁵⁾。しかしこの規定は瑩山禅師が覚心に参じた時期よりも五・六年後に成立したものではあるが、これは覚心の指導に基づき修行していた興国寺の行法により成立しているから、瑩山禅師が参随した時と殆んど同じと思われる。

このように禅密兼修の無本の膝下に投じた瑩山禅師はその影響を受けたことは云うまでもない。それは瑩山禅師入滅時の示衆語「念起是病、不統是藥、一切善惡、都莫思量、白雲万里」が無本の『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』や『鷲峰開山法燈円明国師塔銘』にある「師（無本）四十六歳、上三天台、礼三応眞、過石橋、供養、有感、偶睹壁間所書、念起是病、不統是藥、正抓痒处」によつており、また瑩山禅師の遺偈にある「幾度売来買去新」も無本の師無門慧開の語録下・小参にあるとされている⁽¹⁷⁾。

それのみならず密教の受容は『洞谷清規』（『瑩山清規』）にも導入されている。『禅苑清規』『備用清規』『勅修百丈清規』『永平清規』などの諸清規（禅宗寺院における修行僧の生活規則）や、永平寺・宝慶寺・東福寺・興国寺・大乘寺などにおける諸行法を摂取し、仏法の興隆は行事にあり、法会には禅喜法悦があるとして元亨四年（一二三二）成立した『洞谷清規』は、後人による改変もあるとされる（『瑩山禅師の研究』『洞谷清規の制定』）が、日中・月中・

年中行事に分け詳説している。『永平清規』が出家僧団の規矩と意義を提示したのに対し、『洞谷清規』はこれを継承しながら、仏法の護持をはじめ、檀信徒や寺院経営を重視して、諷經・祈禱・供養などの儀式・行事を採択し、密教・五行思想などを導入している。一覽しただけでも中国禪林から受容されていた『大仏頂首楞嚴陀羅尼』『消災妙吉祥陀羅尼』『大悲心陀羅尼』、その他『大仏頂尊勝陀羅尼』などを盛んに誦呪していることがわかる。

このような諸方遍参は二年にも充たないものだったが、不退転位を獲得するとともに、広範な見聞と未知の宗教体験があつたことは云うまでもなく、それは一門に依る住持輪番制の導入や、密教受容につながったものと思われる。

(5) 徹通義介禪師

また時代の推移もさることながら、瑩山禪師が永平寺に出家してから加賀大乘寺まで、三十五年にわたり、切れ目なく師事した徹通義介禪師(一二一九—一三〇九)の影響も無視することはできない。徹通禪師の伝記資料は『永平室中聞書』(『永平開山御遺言記録』)『永平寺三祖行業記』『三大尊行狀記』『曹洞列祖行業記』『日域洞上諸祖伝』上『日本洞上聯燈録』『大乘聯芳志』『延宝伝燈録』七『本朝高僧伝』二一などがある。これらの資料によると、義介は承久元年(一二一九)越前北足羽郷(あすわ)に生まれ、波著寺(なつき)懷鑑について出家し、義鑑と安名された。波著寺は『本朝高僧伝』に「波著寺^{ナツキ}」とあり、『望月仏教大辞典』も「義介」の項に「同州波著寺^{ナツキ}」とあるが、これは波著^{なみつき}波が打ち寄せるような所にある寺の意であり、日本達磨宗の一拠点であつた。

日本達磨宗は大慧宗杲(一〇八九—一一六三)の弟子で、道元禪師から「仏法の機関を知らず、ひとへに貪名愛利のみ¹⁹」と酷評された拙庵徳光(一二二一—一二四三)から大日房能忍(生没年不詳)に系譜したものである。大日房能忍は栄西の『興禪護国論』第三門余に修行もせず、戒律も護持せず、偃臥しているのみと激しく攻撃されているが、

日蓮（一二二一—八二）が著した『立正安国論』『観心本尊鈔』とともに三天部の一つ『開目鈔』には「建仁年中に法然・大日の二人出来して、念仏宗・禪宗を興行す²⁰」とあり、栄西は天台僧とみられていたのかも知れないが、能忍を禪宗の旗手として高く評価している。金沢文庫資料『非相伝授抄』に「大日御房云達磨宗ハ超顕密二宗、是心宗ナリ云々」とあり、また『成等正覚論』によると、自心即仏を説き、信を強調し、所求即成を期するものであったが、大日房能忍から、大和多武峰覺晏、それから懷鑑を中心とする越前波著寺に拠点を移している。

『伝光録』第五十二祖永平牂和尚の条に、

淨土の教門を學し、小坂の奥義をきゝ後多武の峰仏地上人遠く仏照禪師の祖風をうけて、見性の義を談ず。師ゆきてとふらふ。精窮群に超ゆ。有時首楞嚴經の談あり。頻伽瓶喩のところ²¹にいたりて、空をいるゝに空増せず。空をとるに空滅せずと云ふにいたりて、深く契処あり。仏地上人曰く、いかんが無始曠劫よりこのかた罪根惑障悉く消し、苦みな解脱しをはると。時に会の学人三十余輩みなもて奇異のおもひをなし、皆ことごとく敬慕す²²とある。

また『本朝高僧伝』摂州三宝寺沙門能忍の条に、能忍の上足覺晏（仏地房）は、能忍から印記を得て多武峰に拠り、盛んに禪要を唱えた。また臨終にあたり懷牂に道元禪師の会下に参ずるよう勧め、自ら撰した心要提示と、能忍から授った什物を付した。道元は心要提示を見て晏師は明眼の人であると大いに嘆賞したとある²³。

多武峰は始め興福寺の所管であったが、後比叡山の末寺になったので、しばしば興福寺の襲撃を受けた。懷鑑・懷牂らは止むなく波著寺に拠点を求めたと思われるが、波著寺は日本達磨宗の一拠点であるのみならず白山系天台教団の影響下にある諸宗兼学の寺院であった。また承澄（一二〇五—八二）撰『阿婆縛抄』（仁治三年（一二四二）から弘安四年（一二八二）まで台密の修法・作法および図像の集成書。二二八卷）巻第十一「延暦寺灌頂」の奥書に「文永八年正月二十四日以小河殿御草本写了^{ナツキ}於越州波寄^{ナツキ}旅^{ナツキ}浪^{ナツキ}書了^{云々}」²⁴とあり、文永八年（一二七一）承澄が旅宿し

て「延暦寺灌頂」を書写した越州波寄元応寺ナミツキと思われる。また『建搆記』（瑞長本）によると、文永十年（一二七三）十月二十日、波著寺で住僧某が『正法眼蔵』『仏性』巻を書写したとあるから、永平寺とも何等かの関係があったらしい。

義鑑は叡山に登って円戒を受け、天台学の研究に励んだが、波著寺に帰山し、楞嚴を究め、浄業を修した懷鑑から『首楞嚴經』や浄土三部經を学んでいる。⁽²³⁾ このことから波著寺は諸宗兼学の寺院であったことがわかる。仁治二年（一二四一）、懷鑑とともに深草興聖寺道元禪師（一二〇〇—一五三）に参じ、寛元元年（一二四三）禪師の北越入山にも従った。しかし懷鑑らは日本達磨宗の最後の孤塁を守るべく波著寺へ帰山したらしい。また永光寺には懷鑑の袈裟が所蔵されている。義介はその力量を認められ、典座や鑑寺の要職を務めている。典座職については『典座教訓』に「典座の一職は、是れ衆僧の弁食を掌どる。禪苑清規に云く、衆僧を供養す故に典座有りと。古より道心の師僧、発心の高士充て来るの職なり。蓋し一色の弁道に猶る歟」⁽²⁴⁾（原漢文）とあり、『知事清規』には「典座の時に大事を發明せし例」⁽²⁵⁾（原漢文）として、瀕山靈祐・漸源仲興・大陽道楷を挙げている。また「監寺に充てられし時、大事を發明せし例」⁽²⁶⁾（原漢文）として金陵報恩院玄則・袁州楊岐方会を挙げている。

このような要職に充てられたのは義介が越前出身であることも然る事ながら、寺院経営に抜群の能力があったからである。『本朝高僧伝』にも「昼は衆事を弁営し、夜は禅坐旦に達す」⁽²⁷⁾（原漢文）とあるように、日夜弁道に励んでいる。建長三年（一二五一）懷鑑から仏照（拙庵徳光）下の印可書と「菩薩戒儀軌」を受けているが、これは前にも触れた大日能忍・覺晏・懷鑑・義鑑と系譜する日本達磨宗第四世になったことになる。これが後に永平寺第三世住持職を退く一因にもなり、また後述するように義介の弟子瑩山禪師が正伝の仏法の伝燈を明らかにするため、『伝光録』（正安二年（一一三〇）請益始む）を提唱し、元亨元年（一二三二）六月十七日著の『観音堂縁起』（重要文化財）の奥書に「釈迦牟尼仏五十四世伝法瑩山紹瑾」（花押）と記し、さらには義介の塔頭定光院に奉納した署名が「釈迦牟尼

仏五十四世法孫洞谷紹瑾記」とあり、『磐山和尚清規』「年中行事」の中にも「洞谷山永光禪寺開闢釈迦牟尼仏五十四世伝法沙門紹瑾」とある。また元亨三年には永光寺に五老峰（天童如浄語録・永平道元霊骨・孤雲懷辨血経・徹通義介嗣書・磐山紹瑾嗣書などの遺品を納めた）を築造する因由になったものである。因みにこの五老峰は正伝の仏法の伝燈を明らかにするとともに、後述する總持寺には正中元年（一二三四）いち早く僧堂を開き、修行の拠点とされたのに対し、永光寺を信仰の拠点として位置づけるものだった。

建長五年（一二五三）の『永平開山御遺言記録』（『永平室中間書』）によると、義介三十五歳のとき、道元禪師から「仏法に於て随分に道念あるも、皆其の情を知る、唯未だ老婆心あらず」³¹（原漢文）「爾世間・出世に於て、其の志気あるを知る。唯未だ老婆心あらず」³²（原漢文）と、前後三回にわたり老婆心（親切心）の欠如を指摘されている。

また無視できないものは建長五年八月三日に八斎戒印板を賜わっていることである。この印板の記事については授与以外何等触れていないので、従来見逃され問題にされなかったものかも知れない。八斎戒は六斎日（八・十四・十五・二十三・二十九・三十日）に八戒（不殺生戒・不偷盜戒・不姪戒・不妄語戒・不飲酒戒・の不塗飾香鬘舞歌観聴戒・不眠坐高嚴麗床戒・不食非時食戒）を守るもので、在家が出家生活に一步近づく意義をもち、僧俗を結ぶ有力な方法として重視しなければならないが、八斎戒印板があるということは、民衆教化の盛行を実証するものに他ならない。『伝光録』第五十一章「永平元和尚章」に

興聖に住せし時、神明来りて聴戒し、布薩ごとに参見す。永平寺にして竜神来りて八斎戒を請し、日々回向に預らんと願ひ出で見ゆ。これによりて日々に八斎戒をかき回向せらる。いまにいたるまでおこたることなし。³⁴

とある。これによると興聖寺在住時には神明が布薩（八斎戒）ごとに來聴し、永平寺では竜神が八斎戒を求めたとあるが、この神明と竜神は強弁かも知れないが、教化を望んで参集した道俗諸階層を示すものではなからうか。このように理解すると、道俗諸階層が参集した宇治興聖寺においては、道に対しては『普勸坐禅儀』『弁道話』『学道用心

集』『典座教訓』などの宗乗を教示し、俗に對しては説戒布薩（八齋戒）による教行が行われていた。また永平寺は出家者の専門道場ではあるが、八齋戒印板による民衆教化にも努めていたと考えなければならない。また義介に与えられたことは、民衆教化に努めるべく示されたものと思われる。

同じく建長五年八月六日、道元禪師が療養のため上洛のみぎり

我寺院を思う故傭を留置く、相構えて寺院能く能く照顧すべき也。汝当国の人。故豎師弟子、故国中多くこれを知る。内外に付て子細を存する有る故留め置く。⁽³⁵⁾（原漢文）

と永平寺維持について子細に遺言されたのに対し、義介は畏れ承つて

尋常肝に銘じて忘れざる也。⁽³⁶⁾（原漢文）
と答えている。

建長七年（一二五五）には永平寺第二代懷辨（一一九八—一二八〇）から嗣法をうけるとともに、『正法眼蔵』嗣書を書写・校合している。懷辨は道元禪師会下に投じて以来四十七年間常隨し、禪師の遺跡を継ぎ、一切異ならず信受奉行したとされている。翌八年には『先徳語録』（永平寺蔵、建長八年夏安居日在越州吉祥山永平寺衆寮以先師御書本書写畢一校了比丘義介）を書写・校合し、また正嘉二年（一二五八）四月廿五日には懷辨（一説義介）が書写した『正法眼蔵』仏性を校合し、⁽³⁷⁾「山水経」も書写しているが、如浄三十三回忌、道元七回忌の正元元年（一二五九）に、懷辨や義演とともに『正法眼蔵』の書写・校合などに励んでいる時、懷辨から永平寺伽藍整備の委嘱を受けている。それは懷辨が『正法眼蔵』『弁道話』に「まのあたり大宋国にして禅林の風規を見聞し、智識の玄旨を稟持せしをしるしあつめて、参学閑道の人⁽³⁸⁾にのこして、仏家の正法をしらしめんとす。」⁽³⁸⁾と述べているように、道元禪師から宋朝禅林の風規や玄旨の稟持など、その実情を具体的に教授されていたからである。

当時の永平寺は『永平寺三祖行業記』に「土木未だ備わらず、堂閣わずか⁽³⁹⁾」（原漢文）、とあるような状況だっ

た。この両三は『百丈清規』の中核をなす『禪門規式』によつたもので、法堂・僧堂・庫院であり、仏殿はない。唐代の禪林では法堂を建て、仏殿は建てない習慣だつたようである。このような法堂・僧堂・庫院からなる永平寺の伽藍結構は、道元禪師が唐朝禪を慕われた証拠であり、これが慕古に他ならない。

また、『永平寺三祖行業記』には懷昇が義介につぎのように指示している。

昇公有る時囑して云、先師の宗旨建立は公に憑る。諸方の叢林・宋朝の風俗、就中先師（道元）の道を伝えし天童山の規矩、及び大刹叢林の現規を記録し来りて、当山（永平寺）の叢席を一興すべし。宛も是れ先師の恩に報ゆる者なり。（中略）加之、祖翁榮西僧正の素意なり。然れども叢林の微細なる規矩と禪家諸師の語録以下、一切の聖教は、皆以て先年の興聖寺焼失の時、或は紛失す。本清規はこれ有りと雖も、時の風俗に随ひ、現規と折中すること尤も大用なり。諸方を遍参し、大国を歴観して、以て永平の宗旨を建立すべし。⁽⁴⁾（原漢文）

このように諸方の叢林、宋朝の風俗、天童山の規矩や大刹叢林の規矩を記録して、現在行われている清規と折中することは、清規の革新改訂を目指すことになり、それは同時に慕古を抛擲することでもあつたが、それは永平寺をより充実させ、道元禪師の教えである衆生濟度・仏法弘通のためであつた。義介は指示にしたがい京都建仁寺・東福寺・鎌倉寿福寺・建長寺を遍歴順観し、正元元年（一二五九）入宋するが、入宋にあたり航海の無事を祈つて、如意輪觀音・虚空藏菩薩像を彫り、願書誓文に「吾れ先師の往願を果さん為、永平の宗風を日本国裏に一興せんと欲す」⁽⁴⁾（原漢文）と記している。このような義介の願望が、やがて瑩山禪師の民衆教化、さらには曹洞宗教団発展の母胎になったことは間違いない。

入宋後は浙江省明州の径山、道元禪師が修行した天童山など江南の諸禪刹を歴遊しているが、具体的には明らかでない。ただ当時の天童山は火災により伽藍の大半が焼失し、無準師範の高弟別山祖智が復興に努めていたから、道元禪師参学時代の伽藍は見る事ができなかった。

道元禪師は正師を求めて渡海したが、当時の宋朝禪林の動向は、楊岐派の勢力が圧倒的で、大慧宗杲（一一〇八—一一六三）下の拙菴徳光（一一二一—一二〇三）は前にも触れたようにひとへに貪名愛利のみであり、三教一致思想は「一鼎三足の邪計」⁽⁴²⁾、さらには教外別伝思想も妄談として宋朝禪を批判し、唐朝禪への思慕があつたが、義介の入宋は道元禪師帰朝後三十五年であるから、宋朝禪林自体も相当に変質変容していたと思われる。そのような禪林の規矩や伽藍結構および法具などの記録、さらには時の風俗に随い、現規と折中することが目的であつたから、宋朝禪の導入ということにならざるを得なかつた。

入宋中に『洞谷記』によると「謁^二聞偃溪^一跋^二宏智真怙^一」⁽⁴³⁾とあり、臨濟宗大慧派の偃溪広聞（一一八六—一二六三）と相見し、宏智正覺（一一〇九—一一五七）の真帖に跋文を得ている。宏智正覺は真歇清了（一一〇八九—一一五二）とともに丹霞子淳（一〇六四—一一一七）の弟子で正伝の宗風（默照禪・宏智禪）を挙掲し、天童山中興とされ、大慧宗杲とともに禪門の二甘露門と称されているから、宏智の影響も受けていることは間違いない。また瑩山禪師も永光寺開堂法語が、宏智の開堂法語を意識的に引用し、構成まで一致しており、『永光寺中興雜記』にも宏智寿影の自贊「一葉落時天下秋 不風流処也風流 木人退歩金繩斷 直下無機索鉄牛」があることは、宏智の影響を無視することはできない。

弘長二年（一二六二）四十四歳無事に帰朝し、『大宋名藍図』（南宋寺院の伽藍や法具の見取図）一般に『五山十刹図』（大乘寺蔵）を將來しているが、その他に前述の偃溪宏聞跋宏智正覺（天童覚和尚）の真帖、如淨禪師自贊頂相⁽⁴⁴⁾も持ち帰つたとされる。

帰朝後は懷井下にあつて鋭意伽藍の整備に努めたが、文永四年（一二六七）、四十九歳で懷井の後を受け永平寺第三代住持に出世している。義介は住持として、また懷井の意を体して、本格的に寺門の興隆を図り、教団の発展を願う寺院運営に励んでいる。その実情については『永平寺三祖行業記』に

山門を建て、両廊（東西）を造り、三尊（天童山に模して釈迦・弥陀・弥勒）を安置し、祖師三尊・土地五軀悉くこれを造る。四節の礼儀、初後更点、粥罷諷經、掛搭の儀式等の礼法悉く師の調行する所なり。（中略）永平の中興と謂うべし。⁽⁴⁵⁾（原漢文）

とあるように、目覚しい活躍をしている。このような義介の進歩的・積極的寺院運営は、道元禪師の「済度衆生・仏法弘通」のための時代即応のものとして必須であった。しかし義演（永平寺書記、『正法眼蔵』袈裟功德・八大人覺・伝衣の書写、『永平広録』卷五・六・七編集に關与）や、寂円（隱逸的・保守的）らが、『正法眼蔵隨聞記』（文暦元年（一二三四）から四年間の記録）に、

当世の人、多く造像起塔等の事を仏法興隆と思へり。是れ亦非なり。（中略）今ま僧堂を立てんとて勸進をもし随分にいとなむ事は、必ずしも仏法興隆と思はず。⁽⁴⁶⁾

とある動向を根拠に、義介が進める造像起塔を批判し、真つ向から反対した。これはあるいは義介が永平寺の典座や監寺などの要職を歴任し、さらには渡海求法して、永平寺第三代になったという輝かしい経歴、日本達磨宗の嗣承や、性格的に老婆心の欠如などに対する義演一派の嫉妬・反発もあったかも知れない。

文永九年（一二二二）五十四歳のとき永平寺を退院し、懷昇が再び住持になるが、義介は永平寺山内（門前）に養母堂を建て、唐の睦州道明（道蹤、黄檗希運の嗣）が蒲鞋を製し母を養った（陳蒲鞋）の故事のように、母を養い、東堂として八年間内観自省の日を送っていた。しかしその庵居は『御遺言記録』に「若し自ら他遊しても本寺（永平寺）に帰来して、庵居・寓住汝の意に任すべし」⁽⁴⁷⁾（原漢文）とあるように道元禪師の御命にしたがったものでもあった。その間美濃の檀越が寺を建立し招請したが応ぜず、代わりに同門の道存（？—一二八九）が美濃西願寺・衆林寺住持として迎えられている。

弘安三年（一二八〇）六十二歳のとき、懷昇禪師示寂により、永平寺に再び住持することになり『元祖孤雲徹通三

大尊行狀記』に「報恩愍重⁽⁴⁸⁾」とあるように、報恩の一念で愍ろにかつ慎重に、永平寺の管理運営につとめたとと思われるが、義演・寂円ら保守派との内紛は依然として鎮静せず、遂に弘安十年（一二八七）六十九歳のとき永平寺を去ることになる。この義介退院については、『正法眼蔵』『重雲堂式』に

堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがひに道業を一興すべし。⁽⁴⁹⁾

あるいは『吉祥山永平寺衆寮箴規』に

闔寮の清衆各^{おののお}父母、兄弟^{ひんてい}、骨肉、師僧、善知識の念に住し、相互ひに慈愛し、自他顧憐して、潜^{なんち}に難値難遇^{なんぐう}の想^{おも}有らば、必ず和合和睦の顔^{かんば}を見ん。⁽⁵⁰⁾（原漢文）

と誠めているにも拘わらず、このような事態になったことは、極めて遺憾といわざるを得ない。

義介は止むなく永仁元年（一二九三）七十五歳のとき永平寺を離れ、大乘寺に移り開堂しているが、永平寺退院に当り、河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』でも触れているが、自らも書写・校合に加わった道元禪師新輯の七十五卷本・十二卷本『正法眼蔵』を携行したことは間違いない。そしてこれは瑩山禪師、さらにはその会下に謄写された。それは現在永光寺に七十五卷本（零本）・十二卷本が所蔵されていることからわかる。總持寺に謄写・伝播されたものは總持寺五院にも謄写され、また五院とりわけ大徹宗令の伝法庵輪住を介して北陸や東北地方に謄写・伝播することになる。伝法庵本の謄写・伝播については、河村孝道『正法眼蔵成立史的研究』や広瀬良弘『禪宗地方展開史の研究』で詳細に触れているが、（広瀬は伝法庵への伝播系路、永平寺―徹通義介（大乘寺）―瑩山禪師（永光寺・總持寺↓總持寺五院）には触れていない）。その実情は五院輪住において後述する。

大乘寺は弘長元年（一二六一）、富樫家尚が創建し、真言宗の澄海阿闍梨を住持にした。澄海は波著寺時代の義介の弟子であったから、師の不遇を痛惜して檀越とはかり、義介を大乘寺住持に招請した。

永平寺を離れ大乘寺に移った時の心情は如何なものだっただろうか。『御遺言記録』に

当寺（永平寺）は勝地たるに依つて執思する処と雖も、それまた世に随い、時に随うべし。仏法いずれの地においても、所行の勝地となすなり。⁽³¹⁾（原漢文）

とあり、『正法眼蔵』『弁道話』に

その化をしくさかひ、いづれのところか仏国土にあらざらん。このゆゑに仏祖の道を流通せん、かならずしもところをえらび、縁をまつべきにあらず。ただけふをはじめとおもはんや。⁽³²⁾

とあり、『正法眼蔵随聞記』第一の二〇にも

只時にのぞみ事に触れて、興法の為め利生の為に諸事を斟酌すべきなり。⁽³³⁾

とあるので、義介における大乘寺転住の心境も、あるいは随世・随時・所行の勝地、いづれのところも仏国土と理解していたと思われる。因みに寂円の宝慶寺、詮慧の京都永興寺・義尹の肥後大慈寺、義準の宇治興聖寺なども、それぞれの事情は異なっていたと思われるが、それぞれの地を所行の勝地としてあるいは修行に励み、あるいは教化活動に努めたと考えるべきである。

少し徹通義介に深入りしたが、瑩山禅師の生涯に戻る。前に述べたように、諸方遍参は二年にも充たないものだったが、不退転位を得るとともに、広範な見聞と未知の宗教体験があったことは間違いない。『洞谷記』をはじめ諸伝記によると、弘安九年（一二八六）宝慶寺に帰山しているが、寺務拔群であったから維那になっている。これは遍参による成果が評価された証しと思われる。また正応二年（一二八九）聞声悟道したとあるが、『日本洞上聯燈錄』によると、『法華経』を看読中第十九「法師功德品」の「父母所生眼悉見三千界」に到り悟ったとある。⁽³⁴⁾この得悟については前に義介が入宋中、偃溪広聞に相見し、宏智正覺の真帖に跋文を得て帰朝したと述べたが、宏智は一僧が『法華経』第十九「法師功德品」の「父母所生眼悉皆三千界」と看読しているのを一瞥して省悟を得た因縁と酷似している。⁽³⁵⁾また正応五年（一二九二）には観音の如く大悲闡提之弘誓願（すべての衆生を救済する大悲の誓願）を立てている。⁽³⁶⁾

- (1) 『洞谷記』「円通院縁起」は「越前国多禰觀音堂之敷地也」とあり、『洞谷五祖行実』は「多禰邑」とある。
- (2) 大久保道舟「常済大師誕生の地について」(『跳龍』、昭和二十六年十月) 参照。
- (3) 光地英学「常済大師誕生地の研究」(『仏教研究』第五号) 参照。
- (4) 『曹洞宗全書』宗源下 五〇九下以下参照。
- (5) 『大日本仏教全書』一〇・三・三四一下参照。
- (6) 『曹洞宗全書』宗源下 五一〇上参照。
- (7) 『曹洞宗全書』宗源下 五〇五上参照。
- (8) 『続曹洞宗全書』清規
儀式 八六〇下参照。
- (9) この視点によると、『瑩山禪師御遺墨集』に収録されている十一總持寺十箇条之亀鏡、十三總持寺讓与状及び法衣伝授語、十八自賛画像(正中二年石川與七尾市田鶴浜町東嶺寺)、二十一韶陽折脚之画賛、二十二竜天白山之書は親筆でない。
- (10) 『禪門法語全集』第一禪門法語集卷中参照。
- (11) 『大日本古文書』家わけ第二十「東福寺文書之一」八三頁参照。
- (12) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五一七上以下) 参照。
- (13) 『大日本仏教全書』一〇・二・二二下参照。
- (14) 『日本歴史地名体系』(31)(和歌山県) 参照。
- (15) 田中久雄『鎌倉仏教』(教育社刊) 参照。
- (16) 光地英学「瑩山禪師の密教的配慮とその来由」(『宗学研究』第二号) 参照。
- (17) 同右。これに対し、東隆真は「瑩山禪師の研究」『遷化』の項二七五頁以下で『大慧書』上などにより批判している。
- (18) 『大日本仏教全書』一〇・三・三〇六下参照。
- (19) 『正法眼蔵』「行持下」(岩波文庫本中六五頁) 参照。
- (20) 『日蓮文集』岩波文庫本二八七頁参照。
- (21) 岩波文庫本二四四頁参照。

- (22) 『大日本仏教全書』一〇二・二七三下参照。
- (23) 『大正新修大藏經』圖像第八・六〇上参照。なお澁谷亮泰編『昭和天台書籍綜合目録』上巻五六七頁下段に『延暦寺灌頂』は収録されているが、奥書は最初の「建長三年十一月十四日於小河草了」のみ掲げ、つぎの元応寺がある文永八年の条以下はないので、索引の元応寺の項にも欠落している。また『大日本仏教全書』三五・一四五上には「文永八年正月廿四日以小河殿御草本写了。於越州波寄旅糧書了」^{云々}。元亨元年^{辛酉}八月十七日於元応寺越州客僧詠写了。即多時交点了 惠鎮記之」とある。
- (24) 河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』四九八頁参照。
- (25) 『日域洞上聯燈録』（曹洞宗全書）史伝上二三八下）参照。
- (26) 『道元禪師清規』岩波文庫本一七頁参照。
- (27) 同右、一二一頁以下参照。
- (28) 同右、一二五頁以下参照。
- (29) 『大日本仏教全書』一〇二・三〇六下参照。
- (30) 同右参照。
- (31) 『曹洞宗全書』宗源下 二五六下参照。
- (32) 同右、一二五七上参照。
- (33) 同右参照。
- (34) 『伝光録』岩波文庫本二三九頁参照。
- (35) 『永平開山御遺言記録』（曹洞宗全書）宗源下 二五七上）参照。
- (36) 同右参照。
- (37) 河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』四九八頁参照。
- (38) 岩波文庫本上五六頁参照。
- (39) 『曹洞宗全書』史伝上 三下参照。
- (40) 同右七下参照。
- (41) 同右、参照。
- (42) 『正法眼蔵』「四禪比丘」（岩波文庫本下二二五頁）参照。

- (43) 『曹洞宗全書』 宗源下 五一五下参照。
- (44) 後世に写されたものが大乘寺にある。
- (45) 『曹洞宗全書』 史伝上 八上参照。
- (46) 岩波文庫本五〇頁以下参照。
- (47) 『曹洞宗全書』 宗源下 二五六上参照。
- (48) 『曹洞宗全書』 史伝上 一八下参照。
- (49) 岩波文庫本上九五頁参照。
- (50) 『道元禪師清規』 (岩波文庫本九五頁) 参照。
- (51) 『曹洞宗全書』 宗源下 二五六上参照。
- (52) 岩波文庫本上七七頁参照。
- (53) 岩波文庫本四〇頁参照。
- (54) 『曹洞宗全書』 史伝上 二四四下参照。
- (55) 聞吉悟道では「香巖擊竹」が有名であるが、これに対する見色明心では靈雲志勤の「一見桃華」が有名である。また『日本洞上聯燈錄』卷二(『曹洞宗全書』 史伝上 二五一下) 菴庵至簡の条に、瑩山上堂語「靈雲見桃花因縁」を挙げ、菴庵は忽然契悟したとある。
- (56) 『洞谷記』 (『曹洞宗全書』 宗源下 五〇五上) 参照。

(6) 大乘寺・城万寺

正応六年（一二九三）瑩山禪師は義介に従い加賀大乘寺（金沢市）に移っている。大乘寺は前にも触れたが、弘長元年（一二六一）富樫家尚が菩提寺として建立したもので、その一族は有力な檀越だった。永仁元年（一二九三）には法堂の建立に尽力している。

永仁三年（一二九五）二十八歳、阿州海部城満寺の住持に出世している。^①その経緯については、東隆真『瑩山禪師の研究』はじめて従来海部に在住する大乘寺檀越富樫一族の招請によるものであるとしている。しかし『阿波國古文書』（東大史料編纂所蔵）中に「坪内氏系図」があり、それに「姓藤原 富樫氏 後改前野 又改坪内」とある。そればかりか系図「大織冠鎌足公」^{此間略}家国—信家—家通—家経—家直—家尚^{富樫氏}—家道^{富樫氏}（以下略）にも家尚があるから、従来の説は具体的ではないが誤りではない。しかし血縁関係だけではなく、地縁関係も無視することはできない。それは前に触れた遍参で興国寺無本覚心の会下に投じたことである。興国寺は和歌山県由良にあり、城万寺のある徳島県海部とは海上交通で至近距離にあるので、瑩山禪師には多分に親近感もあつたと思われる。しかし未嗣法で住持就任は注目する必要がある。

永仁四年（一二九六）城万寺住持中に、永平寺第四代義演（？—一二三四）について受戒作法の「仏祖正伝菩薩戒作法」を受けているが、『洞谷記』には「廿九歳にして永平演老に就いて、受戒作法を許可さる」^②（原漢文）とある。しかし『洞谷五祖行実』には城万寺に寓する前（廿二歳以降）、菩薩大戒を義演に受く^③とあり、年代が一致していない。瑩山禪師は初めて戒法を開き、眼可鉄鏡（城万寺最初首座）ら五人を度し、三十一歳までに七十余人に授戒している。^④

正安元年（一二九九）には師命を奉じ、海部から大乘寺に帰錫し、義介から嗣法を受け、長嫡となり、大乘寺最初^⑤の半座（首座）になつて^⑥いるが、「汝越師の気概あり、宜しく永平の宗旨を興すべし」^⑥（原漢文）と励まされている。

嗣法について『日本洞上聯燈録』は

聞^三(徹)通上堂拳^二平常心是道話^一。豁然徹證。乃曰。我会也。通曰。爾作麼生会。師曰。黑漆崑崙夜裏走。通曰。未在更道。師曰。逢^レ茶喫^レ茶。逢^レ飯喫^レ飯。^⑦

とある。「平常心是道」に対して「黒漆崑崙夜裏走」「逢茶喫茶逢飯喫飯」と答えたので、徹通は黙許して付授したとある。

正安二年(一三〇〇)には『伝光録』の巻首に「師於^{ヨリ}正安二年正月十二日^一始^テ請益^ス」^⑧とあるように、『伝光録』を開演している。これは前にも述べたように、『観音堂縁起』の奥書や五老峰の築造とともに、正伝の仏法を相承していることを明らかにするために著したものであるが、一・二注目するものがあるので敢えて紹介しておきたい。

一つは前に触れた道元章における八斎戒印板についてであるが、他の一つは第五十二祖永平牂和尚章にある。

永平開山曰く、人、道をもとむること、世にたかきいろにあはんとおもひ、こはきかたきをうたんとおもひ、堅城をやぶらんとおもふがごとくなるべし。志すでにふかきによりて、このいろに終にあはざることなし。この心をもて、道にひるがへさん時千人は千人ながら、万人は万人ながらみな是れ悉く得道すべし。然れば諸人者、道は無相大乘の法、かならず機をえらぶ。初機後学のいたるべきにあらずとおもふことなかれ。このところにすべて利鈍なく、すべて所務なし。^⑨

これに対し『正法眼藏隨聞記』第一の十四に

今各も一向に思ひきりて修してみよ。十人は十人ながら得道すべきなり。^⑩

とあり、また第二の十四に

学道は是れ全く多聞高才を用ひぬ故へに、下根劣器と嫌ふべからず。誠の学道はやすかるべきなり。然あれども大宋国の叢林にも、一師の会下の数百千人の中に、まことの得道得法の人はずかに一人二人なり。(中略)今

ま是を案ずるに志の至ると至らざるとなり。(中略) 若し此の心あらん人は、下智劣根をも云はず、愚痴惡人を
も論ぜず、必ず悟りを得べきなり。^⑪

とある。道元禪師の説示を筆録した『正法眼藏隨聞記』に「十人は十人ながら」得道するとあるのを、瑩山禪師は「千人は千人ながら、万人は万人ながら」得道すると示している。これは道元禪師の思想を継承し、表現のうえで強調していることがわかる。

『元祖孤雲徹通三大尊行狀記』に「老衰して接化に堪えず。紹瑾をして住持を継がしめ、隱居獨菴」^⑫(原漢文)とあるように、乾元元年(一三〇二)義介は大乗寺を退院し、瑩山禪師に住持職を譲っている。また嘉元四年(一二三〇・六)正月には自賛頂相を明峰素哲(一二七七—一三五〇)に与えている。

自賛は

古業受生雖各別 即身是仏有何疑

從來俱住未知面 今日拜看非我誰

于時嘉元^{丙午}正月 日書 比丘鑒徹通

与哲侍者^⑬

とある。現在大乗寺蔵の義介自賛像には、贊の後に「永享^{甲寅}秋八月祖英拜書」とあり、永享六年(一四三四)八月、祖英が写したものである。また『中興雜記』によると、同年八月二十八日に前住大乗寺義鑑(義介)からつぎに記す「示紹瑾長老」とある洞家嗣書の次第を受けている。

示紹瑾長老

夫佛^レ法^ハ者必^ス有^リ嗣^ニ法^ハ者定^テ帶^ス嗣^ニ書^ヲ

七宗相嗣四七二三青原南嶽兩派門下五家

七宗ノ諸師宗匠皆^ナ帶^フ書^ヲ嗣^ニ先^ハ師永^ニ平^ニ

元^ニ和^ニ尚在^ニ宋^ノ日遍^ニ參^{シテ}諸^ニ師^ニ拜^ニ見^ス五^ノ家^ノ嗣

書^ヲ此^ノ事^ト委^ク在^ニ先^ニ師^ノ所^ニ作^一之^ニ卷^ニ書^ニ名^ク嗣

書^ト然^ハ予^ハ兩^ノ師^ニ見^{ヘテ}之^ニ帶^ス兩^ノ家^ノ書^ヲ所^ニ謂^ニ臨^ニ

濟^ニ家^ト與^ト洞^ト山^ト家^ト也^リ臨^ニ才^ハ者大^ニ惠^ノ上^ニ足^ニ佛

昭禪師引^ニ佛^ノ在世^ノ之^ニ直^ニ主^ニ法^ノ壽^ノ例^ヲ雖^レ不^レ

見^レ面^ニ遙^ニ嗣^ニ日^本能^ニ忍^ニ上^ノ人^ニ忍^ニ嗣^ニ覺^ニ宴^ニ

宴^ニ嗣^ニ吾^ハ師^ノ懷^ニ鑑^ニ鑑^ニ嗣^ニ予^ニ稟^ニ師^ノ命^ヲ

重^テ嗣^ク當^ニ家^ヲ其^ノ由^ハ者建^ニ長^ニ五^ノ年^ノ夏^ニ鑑^ノ云^ニ嗣

書^ヲ相^ノ傳^ノ事^ト先^ニ師^ノ御^ニ尋^ニ時^ニ當^ニ家^ノ嗣^ニ

書^ノ事^ト委^ク示^レ之^ヲ其^ノ時^ニ二^ノ代^ノ和^ノ尚^ノ同^ノ座^ニ證^ニ知^ニ別^ニ

紙^ニ委^ク又^タ同^ニ秋^ニ最^ニ後^ニ上^ノ洛^ノ之^ニ尅^ニ仰^ニ付^ニ永^ニ

平^ノ留^ル守^ニ時^ニ蒙^ニ種^ニ契^ニ約^ニ具^ニ別^ニ紙^ニ

先^ニ師^ノ圓^ノ寂^ノ後^ニ予^ハ參^ス永^ニ平^ニ二^ノ代^ノ和^ノ尚^ノ一^ニ即^ニ嗣^ニ當^ニ

家^ノ書^ヲ自^ニ建^ニ長^ニ至^ニ嘉^ニ元^ニ一^ニ五^ノ十^ノ年^ノ保^ニ

持^ス之^ヲ元^ニ年^ニ既^ニ予^キ嗣^レ汝^ニ畢^ク宜^ク善^ク保^シ護^セ弘^ニ通^セヨ
來^ニ際^ニ抑^モ二^ノ代^ノ相^ヲ承^テ以^テ師^ノ嗣^ヲ書^ヲ被^レ付^セ事^ト先^ニ蹤^ヲ
所^レ引^在口^ニ傳^相承^作法^ヲ受^ク付^ニ屬^セル^先師^門
人^中獨^ニ二^ノ代^ノ而^モ已^ミ見^ニ別^ニ紙^ニ然^カシ^テ或^ル家^ハ於^テ二^ノ代^ニ
有^レ致^ス疑^ニ謗^ヲ聞^ク之^ヲ努力^シ不^レ可^レ信^レ之^佛祖^傳
來^之古^法豈^ニ可^レ構^フ謀^計令^案乎^聖眼

照^覽古^今無^シ私^於二^ノ相^傳事^致疑^謗
者^モ以^テ招^ク罪^業可^レ憐^之可^レ憐^之矣

嘉元四年^{丙午}八月廿八日

前住大乘義鑑御判（花押）

示^之

延慶二年（一三〇九）九月十四日（永光寺年代記）義介は九十一歳で入滅したが、法嗣には瑩山禪師の他大慈寺義尹、永安寺宗円、白岩寺懷暉がいる。

遺偈は「七顛八倒 九十年 蘆花覆雪 午夜月円」であるが、『日本洞上聯燈錄』によると、「師手戰不^レ能^レ成^レ字。命^ニ瑩^山書^一」⁽¹⁵⁾とあり、「永平第三代大乘開山大和尚遷化喪事規記」には

纔書二字書不正、住持問云、次字什麼、答云、顛、即課曰、手振不成字、公代可書、承書之、自八字至円十四字。⁽¹⁶⁾

とあるように、始めの二字までで、手が震えて書けず、瑩山禪師に代筆させている。葬儀については「永平第三代

大乘開山大和尚遷化喪事規記」に喪主・仏事次第・祭奠次第など詳記されているが、大乘寺西北隅に開山塔（定光院）を建塔している。なお『洞谷記』によると、鎮護山門、擁護法命のために「一生所持之嗣書。并六祖御所持之南嶽門下。伝来相承普賢舍利及先師頂骨。自筆五部大乘經」を当山（大乘寺）に奉納しているが、末尾に「釈迦牟尼仏五十四世法孫洞谷紹瑾記」とある。また永光寺には「徹通和尚法衣」「峩山和尚伝法衣」と墨書された徹通義介から瑩山紹瑾、さらに峨山韶碩へ伝えられた袈裟がある。

このように、義介の前半生は永平寺の典座、監寺、渡海求法、永平寺第三代として伽藍結構の整備など順風満帆であったが、後半生は永平寺内紛から大乘寺転住など隠忍甘受する、波乱万丈の生涯であった。しかし終り良ければすべて良いではないが、法嗣に瑩山禪師がでたから花の生涯というべきか。その進歩的・積極的宗風や、隠忍自重の日常底は、瑩山禪師の宗教思想形成、さらには人間形成に大きな影響を与えたことは間違いない。

義介について大乘寺住持になった瑩山禪師は『信心銘拈提』一卷を著している。これは中国禪宗第三祖鑑智僧璨（？―六〇六）が、正伝の宗旨を明らかに示し、將來の邪解を戒めるために四言一四六句で述べた『信心銘』を拈評（古則をとりあげて評釈すること）して著語（自分の見解による寸評）を加えたものである。また大乘寺会下には眼下鉄鏡・明峰素哲・峨山韶碩・無涯智洪・寂室了光・祇陀大智・恭翁運良などがいた。

（7）洞谷山永光寺

『洞谷記』の「洞谷山永光寺草創記」によると、正和元年（一一三二）能登酒井保中河（石川県羽咋市中川町）の地頭酒匂頼嫡女（後に瑩山の弟子黙譜祖忍）と、その夫海野三郎滋野信直が発心して酒井保の山を寄進しているが、その寄進はそれ以降の寄進地の成壊興廢や、和尚の持戒破戒、乃至非人乞者に与えるなど、一切関与せず、再び管領

することはない、という清浄心によるものだった。瑩山禪師も「予終焉偃息之處¹⁸⁾」と決意している。同年八月二十日山中に茅屋を結び飯の庫裏とし、やがて洞谷山永光寺を開き住持になるが、文保元年（一三二七）には酒匂平八頼基（平氏女舎兄）が終焉にあたり、父頼親の屋敷を、父の追善と自身および平氏女の菩提のため施与し、方丈を造るべく遺命し、八月に完成している。また十月二日に形の如く入院儀式を行い、大乗寺を退院し、永光寺に本拠を移している。その砌りに前にも触れたように、徹通義介が永平寺から大乘寺へ転住時に携行した道元禪師親輶七十五巻本・十二巻本『正法眼蔵』を謄写し将来したことはない。

洞谷山永光寺の山号・寺名や伽藍結構、さらには仏殿の三尊およびその造像事情について述べる。まず山号・寺名については『洞谷記』に

予。洞山高祖。十六世之法孫。故慕^二彼家風^一。山名爲^二洞谷^一。改^レ山爲^レ谷。転^二曹溪^一。如^レ爲^二曹山^一。爲^二大陽高祖。十一代法孫^一。故慕^二大陽盈目^一。号^二永光寺^一。仏殿称^二最勝殿^一。最勝王経説時者。観音。虚空蔵。爲^二脇士^一故也。思^二心空及弟^一故。僧堂爲^二選仏場^一。思^二喫飯得力^一故。庫下号^二香積院^一。思^二沐浴開悟^一。浴室号^二明水因^一。

とあり、山号の洞谷山は洞山良介（八〇七—八六九）の家風を慕つてのものであり、永光寺の寺名は大陽警玄（九四二—一〇二七）の大^二太陽の光^一に基づいて付したものである。

また伽藍結構は仏殿、僧堂、庫裡、浴室からなるが、仏殿の造立について『洞谷記』は

同年。四月三日^{庚申}。洞谷仏殿鉞立。^{（元亨）}
（元亨）
 庚申。
 申時。 仏殿。檀那。本願主。淨忍。六合日。^{（21）}
（21）
 祿物者。
 金吾。朝定。
 二貫文。

とあり、元亨二年（一三三二）四月三日鉞立し、本願主は祖忍（永光寺の寺地を寄進した平氏女）、檀那は金吾朝定とあるが、その後に仏殿建立の実情および三尊の安座まで記録されている。それによると四月廿六日屋立、柱立、八月十六日大吉日上棟、大工善真、子息乙頭小三郎任左衛門太夫取幣などがあり、鉞立（木造）から柱立を経て上棟までの経緯、さらには大工・番匠十三人などへの祿物（扶持）・引物（引出物・贈物）など用途（経費）十貫文が細

かに記載されているが、最後に釈迦三尊の最勝殿への安座（虚空蔵菩薩・観世音菩薩・中尊の順序）まである。因みに伽藍結構について「御開山及四哲行状略記」（永光寺蔵）には、つぎのようにある。

始建庫院開山和尚以輪木造多聞・伽羅・三天・安之 嗣造妙莊嚴院方丈 元亨二年、檀越朝定公建最勝殿、

仏殿額也、奉置釈迦尊・観音・虚空蔵、開山和尚云、模最勝王公祝釐也（23）

つぎに仏殿の三尊および三尊の造像事情について述べる。仏殿は最勝殿と称し、最勝王経説時は観音菩薩と虚空蔵菩薩を脇土とする。また

観音。当山先本尊也。故是為「主位脇土」。虚空蔵。為「雨」宝供_レ衆。勸_二請_一之⁽²⁴⁾。

とあり、観音菩薩は先の本尊であるから主位脇土とし、虚空蔵菩薩は宝を雨降らし衆に供するから勸請したとある。また観音菩薩を主位脇土にしたのは、「洞谷十境」の「勝蓮峯」の細註に、昔観音堂があり、勝蓮寺と称したが、破壊して年久しく、又観音堂を立てたので勝蓮峰と名づけるとあり、永光寺の寺地はむかし観音堂があったからである。

洞門の中興とされる面山瑞方（一六八三—一七六九）の『洞上伽藍諸堂安像記』『仏殿三尊』に

拈華の釈迦を安ずれば、則ち脇土は必ず迦葉・阿難なり。若し天冠の毘盧を安ずれば、脇土は必ず文殊・普賢なり。⁽²⁵⁾（原漢文）

とある。また不琢撰荊巖慧璞編『洞上伽藍雜記』『仏殿』にも

或は釈迦尊、左右に文殊・普賢両大士を添う。これを脇土という。或は迦葉・阿難。⁽²⁷⁾（原漢文）

とあるように、脇土は迦葉・阿難と文殊・普賢の二つの様式があったことがわかる。しかし永光寺三尊について『洞上伽藍諸堂安像記』の「仏殿三尊」と「衆寮観音」はつぎのようにある。

仏殿三尊

瑩山和尚永光仏殿に釈迦・観音・虚空蔵を安じてもつて本尊となす。⁽²⁸⁾（原漢文）

衆寮觀音

瑩山和尚洞谷記を案ずるに謂く、仏殿中尊釈迦、左脇土觀世音、右脇土虚空藏、觀音は当山先の本尊なり。故にこれを主位の脇土となす。虚空は宝を雨ふらし、衆に供するためこれを勧請す。⁽²⁾（原漢文）

とある。また本尊の釈迦如来は、平成十二年三月『永光寺史料調査報告書』によると、装身具をつけた宝冠釈迦如来である。宝冠釈迦は華嚴經の思想から、廣大無辺に輝き、また救済する毘盧遮那と異名同体とされる。

永光寺仏殿Ⅱ最勝殿の三尊は、前に触れたように中尊は宝冠釈迦如来Ⅱ毘盧遮那如来、左脇土が觀世音菩薩、右脇土虚空藏菩薩の配置は、『東大寺要録』卷一に、毘盧遮那仏の脇侍について「左方觀自在菩薩、右辺虚空藏高土」⁽³⁾とあるから東大寺と全く同じ様式である。東大寺は総国分寺・金光明四天王護国之寺と呼称され、王法仏法不離一体の護国思想に基づいている。これは瑩山禪師独自の発想によるものと思われるが、禪師の護国思想（国家の救済は衆生救済の究極）を考えるうえで非常に重要であるのみならず、永光寺が「永光護国禪寺」と寺額⁽⁴⁾を掲げる所以でもある。つぎに釈迦三尊の造像事情については、『洞谷記』につきのようにある。

中尊釈迦牟尼仏者。加賀国。井家庄。中田右馬尉。為悲母十三回追善。以参拾貫一木作。瑩山以五十貫奉。饒。左脇土。觀世音菩薩。洛陽高辻大宮。駿河法眼定審が先考定守法眼十三年追弔一木作。右脇土。虚空藏菩薩。加賀国富樫荘。野市。藤次郎。為自身現当願望皆令満足一木作。⁽⁵⁾

このように造像目的と経費について、中尊は加賀中田右馬尉が悲母十三回の追善のため三十貫文で木作し、さらに瑩山禪師が五十貫文で饒り、觀世音菩薩は洛陽の院派仏師定審が、父定守十三年追弔のため木作し、虚空藏菩薩は加賀富樫荘野市藤次郎自身の現当願望満足のため木作したことがわかる。なかでも觀世音菩薩の仏師定審は、徳治三年（一二三〇）武州（横浜）称名寺の釈迦如来像（清凉寺式、重文）の造像に関与した院派仏師（棟梁院保）として父定守とともに墨書銘があることから、永光寺觀世音像は元応二年（一二三〇）以降となり、『洞谷記』の記録と符合

する。

文保二年（一二三二）浄住寺（金沢市土堀）を開創しているが、元亨三年（一二三三）二月、弟子の無涯智洪（？―一二五一）を住持にしている。⁽³³⁾ 元応元年（一二一九）には光孝寺を創建し、同じく弟子の壺庵至簡（？―一三四二）を住持にしている。また同年九月八日には自らの頂相（重要文化財、總持寺蔵）に著賛している。賛はつぎのようである。

誰識庵中不死人

未搖掌握鎮烟塵

凜々威烈無等匹

三尺竹篋奪劔輪

器宇廓落絕学天真

眉毛争致不疑地

端的眼睛又不親

豈元應_{元己未}九月八日

洞谷紹瑾自贊⁽³⁵⁾

同十五日には『洞谷記』に「九月十五日。始「羅漢供」。而毎月十五日供「養之」⁽³⁶⁾とあるように、羅漢供を始め、毎月十五日供養するとあるが、これは『瑩山清規』の月中行事の一つとして規定しており、現在も行われている。因みに道元禪師は宝治三年（一二四九）ころ『羅漢供養講式文』を著している。

また元応元年十二月八日につきのような「洞谷山尽未来際置文」（重文 永光寺蔵）を記している。極めて重要であるが、長文であるから必要な部分を書き下しにして示すことにする。

能州酒井保洞谷山は、平氏酒匂八郎頼親嫡女、法名祖忍清淨寄進の淨処故、紹瑾一生偃息の安樂地とし、來際瑩山遺身安置の塔頭所とす、是を以て自身の嗣書・先師の嗣書・師翁の血経・曾祖の靈骨・高祖の語録を当山の奥頭に安置し、此峯を名づけて五老峯と称す。然れば当山の住持は五老の塔主也。瑩山門徒中嗣法の次第を守り住持興行すべし。(中略)他門必ず五老を崇敬すべからざる故也。これによって尽未來際瑩山嗣法の小師、剃頭の小師、參学の小師、受具受戒、出家在家、諸門弟等、一味同心、当山を以て一大事とし、偏に五老峯を崇敬し奉り、専ら門風を興行すべし。是れ則ち瑩山尽未來際の本望也。仏言く、篤信の檀那之を得る時は、仏法断絶せずと云々。又云く、檀那を敬うこと仏の如くすべし。戒定慧解、皆檀那の力に依りて成就す云々。然る間瑩山今生の仏法修行、此檀越の信心に依りて成就す。故に尽未來際此本願主の子子孫孫を以て、当山の檀越・大恩所となすべし。是の故に師檀和合して、親しく水魚の昵を作し、來際一如にして骨肉の思いを致すべし。(中略) たとい難値難遇の事ありとも、必ず和合和睦の思を生すべし。(中略) 耆通を以て両通に写し、師檀共に折目に判形を加え、一通は寺庫に納め、一通は檀家が持し、師檀相互の後鑑とすべし。(原漢文)

この中に二点重要なことがある。一つは当山(永光寺)は瑩山一生偃息の安樂地であり、遺身の塔頭所であるから、住持は五老(如浄語録・道元靈骨・懷辨血経・義介嗣書・瑩山嗣書を納める)の塔主である。また瑩山の門徒中から嗣法の次第を守り住持興行すべしとある。この五老峰の築造は、永平下に投じた義介以下の日本達磨宗嗣承が済洞にわたっていたので、天童如浄に結びつけ、正伝の仏法を明らかにするとともに継承していることを江湖に示す大きな意義もあつた。また天童如浄の塔所とすることにより、大乘寺・浄住寺・光孝寺などは云うまでもなく、永平寺にも勝るとも劣らぬことを示すものでもあつた。なお前にも触れた『伝光録』も正伝の仏法の伝燈を示し、その一元化を考えて提唱したものであり、『観音堂縁起』の奥書に殊更「釈迦牟尼仏五十四世法孫洞谷紹瑾」と署名したのも、あるいは義介の塔頭定光院に奉納した署名が「釈迦牟尼仏五十四世法孫洞谷紹瑾」とあり、『瑩山和尚清規』「年中行

事」の中に「洞谷山永光禪寺開闢釈迦牟尼仏第五十四世伝法沙門紹瑾」とあるのも言を俟たない。

また永光寺の住持は門徒中から嗣法の次第を守り住持して興行するよう誠しめている。これも遍参修行のところでも触れたように、一流相承の住持制である。それは他門徒は五老峰を崇敬しないという理由からである。

他の一つは檀越の重視である。それは「仏の言く、篤信の檀那之を得る時は、仏法断絶せずと云々。又云く檀那を敬うこと仏の如くすべし、戒定慧解、皆檀那の力に依りて成就す云々。然る間瑩山今生の仏法修行、此檀越の信心に依りて成就す（中略）是の故に師檀和合して、親しく水魚の昵を作し、来際一如にして骨肉の思いを致すべし。（中略）たとい難値難遇の事ありとも必ず和合和睦の思いを生ずべし」（原漢文）と述べている。

この檀越の重視については『道元禪師清規』中の『知事清規』監院の項に「増一阿含第三に云く（中略）檀越施主を恭敬すること、父母に孝順して之を養い、之に侍するが如くすべし。施主は能く戒定智慧を成じ、饒益する所多し。三宝の中において罣解する所無し。能く四事を施すが故に、諸の比丘当に檀越に慈心あるべし」（原漢文）とある。このように檀越施主を恭敬すること、父母に孝順し、父母を養い、これに侍するが如くすべしとある。これに対し瑩山禪師は檀那を敬うこと仏のごとくすべしとある、また道元禪師は『増一阿含経』を引き、檀越に慈心あるべしとあるのに対し、瑩山禪師は師檀和合、水魚の昵、あるいは骨肉の思いを持っていなければならぬとしている。

（8）諸嶽山總持寺の成立

元亨元年（一二三二）七月廿二日、宝冠釈迦三尊を安じた永光護国禪寺で、衆生済度・国家安寧を念じ、正伝の仏法を宣揚していた瑩山禪師に、三密行者定賢権律師から、永代伽藍興隆のため、諸岳寺観音堂および寺領・敷地が寄進されている。いま掲げるとつぎのとおりである。（原漢文、私に訓を付す）

諸岳寺觀音堂の寺領敷地の事

合せて四至分限

右、件の寺地の境、趣味分に非ずと雖も

東を限る火尾ひのお 南を限る厨谷向くりやだにむけ

谷だに 西を限る長峰ながみね 北を限る荒志之あらしの

横道よこみち 末代の為これを寄進し奉る

仍つて違犯せしむる勿れ 庄元百姓等

後見の為の状 件の如し

元亨元年七月廿二日 權律師定賢（花押）⁽⁴⁾

この寄進状には宛書を欠いているが、元亨元年六月十七日付の總持寺成立の緣起を述べた瑩山禪師筆の『觀音堂緣起』（重文、必要部分）から、瑩山禪師宛であることがわかる。

（前略）

また求めずして当寺の請を受け、禪法を興行す。時に元亨元年歲次辛酉四月廿三日の暁天、同国酒井の洞谷に在りて、瑞夢を感ず。当寺はもと教院たり。改めて禪院と為さんと欲す。⁽⁴⁾（後略）（原漢文）

これは總持寺の成立に関わるものであるが、それは教院から禪院、さらには旧仏教から鎌倉新仏教への転換を意味するものだった。また寄進状は觀音堂の寺領・敷地について、その四至分限を示すのみであるが、寺領については改めて後述する。

因みに諸岳觀音堂を寄進した定賢の行実は明らかでない。その初見は永仁四年（一二九六）十一月廿一日、預所（莊園の領家Ⅱ領主の代理として管理する役職）桜井某が、宝幢院護摩堂の毎月十七日供の經費に充てる田地寄進状に、

定賢は「三密修法勤行之仁」⁽⁴³⁾とあるから、真言関係であることは間違いない。また正慶二年（一三三三）三月六日「諸岡寺院主職補任状写」⁽⁴⁴⁾に大法師定員が、先師定賢律師から桑谷内村諸岡寺院主職と寺院の田畠已下を譲られたとあるから、定賢は元亨元年から正慶二年まで十二年の間に、権律師から律師に昇任したこと、諸岡寺が桑谷内村に移転したことがわかる。⁽⁴⁵⁾

また總持寺と定賢との関係は、近世までとぎれることなく続いていたことが、つぎの資料からわかる。

宝泉寺堂宇修補勸化添書願

口上書を以奉願候、

御本山開基定賢律師御遺像之儀、從往昔当院二御愼座^(通)之事、兼^而於御一派^者、別^而委曲御存聞之通二御座候、然^而唯今之草庵年久敷相立、以之外大破至極相成候得共、近年世柄惡敷、修補之所^{江茂}不行届、当時御靈像^并本尊等、風雨のため二被為穢、無勿体迷惑心勞仕候、依^而近比願上兼候得共、先規之通、從御本山諸国御未派^江御副書被成下候様本願候、左候^者、拙僧巡行仕、多少御助施乞請、何卒右御靈堂再建仕度奉存候、御時節柄御難題至極二奉存候得共、律師御由緒之儀、御本山^并於当院^茂尤無扨御事二御座候得^者、ケ様二^未鹿抹^而失敬之族二相成候^而、別^而住職之身分心痛至極、御賢察可被成下候、何分格別之御評儀を以、願之通御許容被仰付可被下候、彌志願成就仕候^者、右御靈堂早速建立仕、永代不朽之香花灯明相続仕、律師之威光益讃仰仕度奉存候、幾重二^茂宜敷奉願之候、以上、

寛政八年辰三月

宝泉寺（印）

御本山

御役局御中

当寺由来之事

一、御本山開基定賢律師、諸岳教寺住職之節、東^者内保村、西^者道下村、北^者和田村、南^者切留村を限、千六百石之御朱印地を以、御開山^江御讓被成候^而、当寺^江御閑住在之候旨承伝候、尤御兩尊拾ヶ条之記掟二^茂、律師之遺書有之候事、

一、当寺^者依為律師示寂之遺跡、從御本山御遺像兩寺二安置被仰付、則茶湯仏餉料^并御転僧五ヶ寺分之官物被附置候、然処中古之住寺^持如何之儀御座候哉、什宝・旧記等不残所持出奔仕、就夫暫無住之砌^右被附置候諸料等^茂中絶仕候、律師入寂之年号一向相知不申族二御座候、尤延宝年中、御開山三百五十廻御遠忌迄^者、律師之御法等^茂急度被仰付候得共、是又中絶仕、其後安永年中、四百五十季之御遠忌に^茂、法会等相勤り不申候、

一、寛文元年、当寺住職宥遍代、律師安置場再建奉願候処、其節御本山二^茂方丈・禅堂御建立之砌故、諸般御多用二付、御合力置被仰付候^而、少々修補而已二^而、其後正徳年中、当寺三十二世頼俊代、御本山^右安置場為再建、諸国御末派^江助成勸化之御副書被為成下、則頼俊為募化諸国^江巡行仕候処、預御施入漸只今之章庵二安置仕来り候、右由来如斯御座候、以上、

尾桜山

寛政八年

宝泉寺⁽⁴⁶⁾

これは寛政八年（一七九六）宝泉寺（櫛比莊道下村）が總持寺役局に宛てたもので、宝泉寺は近年堂宇の修補も出来ず、定賢像や本尊も風雨に穢され心痛している。そこで御願い兼ねるが諸国の末派寺院へ副書を頂ければ、拙僧巡行し御助施乞請して靈堂を再建したい。また「当寺由来之事」には、宝泉寺は定賢律師御示寂の遺跡であるから總持寺からその遺像を安置するよう仰せ付けられ、茶湯仏餉料^并転僧五ヶ寺分の官物（二十五両）を賜っていた。延宝年

中御開山三百五十回御遠忌までは律師の法事も仰せ付けられたが、安永年中四百五十回御遠忌には法事はしなかった。寛文元年（一六六一）宥遍代律師安置場再建を願ったら、總持寺も方丈・禪堂再建の時であったから簡単な修補を行い、その後正徳年中（一七一―一五）当寺三十二世頼俊代に、再建の爲諸国未派寺院に助成勸化の副書を下され、頼俊が諸国巡行して再建したのが、今の草庵とある。

なお諸岡寺については弘安六年（一二八三）五月十二日、荘内にある仏供田の報告書「櫛比莊二个村諸寺仏供田注進状」⁽⁴⁷⁾、永仁三年（一二九五）十一月三日、預所平某が諸岡寺護摩供料田として六（一段の十分の六）を寄進した「櫛比莊預所平某寄進状案」⁽⁴⁸⁾、徳治二年（一二〇七）九月廿一日、某による護摩供料田一を寄進した「某田地寄進状」⁽⁴⁹⁾、嘉暦二年（一二二七）十一月十六日、預所前対馬守鴨某による毎月十七日の大般若会^并五部大乘経供料二反を寄進した「櫛比莊預所鴨某田地寄進状」⁽⁵⁰⁾、年末詳正月十一日、諸岡寺院主職安堵任料錢（院主職を安堵してもらう納入錢）三貫文納入に関する「某連署書状」⁽⁵¹⁾、元弘三年（一二三三）十二月 日の領家某による大般若経転読料一反を寄進した「領家某田地寄進状」⁽⁵²⁾、建武四年（一二三七）正月十四日の能登守護吉見頼隆による寺領の安堵「能登守護吉見頼隆書下」⁽⁵³⁾、暦応四年（一二四二）閏四月十六日の中院某による祈祷所料六を寄進した「中院某田地寄進状」⁽⁵⁴⁾などの寄進状や安堵状があるが、それ以降の史料が見当たらないからその動向は不明である。しかし当時能登国は南朝・北朝の勢力が入り乱れていたから、あるいは政局の混乱にまきこまれて衰退したのかも知れない。

諸岡寺観音堂の寺田については、先に掲げた弘安六年五月十二日の「櫛比莊二个村諸寺仏供田注進状」に「諸岡寺観音堂寺田三反三」とあり、内訳として「御仏供五 仁王講経田九 御花米田一 修理田七 灯油田五 修正田六」⁽⁵⁵⁾とある。これらから諸岡寺では日々の勤行以外に仁王講経会、修正会をはじめ、檀越の依頼による大般若経会・五部大乘経などの仏事が営まれ、民衆教化の実をあげていた。これらの民衆教化活動は当然瑩山禅師に継承されたことは間違いない。なかでも鎮護国家を祈る法会である仁王講経会を行っていたことは注目する必要がある。なお寺領に

ついで、時代は下るが、前にも触れた寛政八年（一七九六）三月の「宝泉寺堂宇修補勸化添書願」の「当寺由来之事」に「御本山開基定賢律師、諸岳教寺住職之節、東_者内保村、西_者道下村、北_者和田村、南_者切留村を限、千六百石之御朱印地を以、御開山_江御讓被成候（以下略）」とあり、千六百石だったことがわかる。

教院諸岳寺観音堂から禅院諸嶽山總持寺に改称興行することになるが、その山号・寺名についても触れる必要がある。山号の諸嶽山は櫛比庄の二所宮である諸岡比古神社に由来するとされているが、寺名の總持寺については明らかでない。或いは諸岳寺観音堂が真言関係の寺であつたからかも知れない。總持は陀羅尼の音写で保持する行為、記憶の保持、精神集中などを意味する言葉である。古代インドでは文字はあつたが、バラモン教以来、聖なる言葉は文字にせず口で伝承した。口による伝承は記憶が最重要であることは間違いない。

善無畏（六三七―七三五）は「解は五乗を究め、道は三学を該ね、總持禅觀は妙に其の源に達す」⁽⁵⁶⁾（原漢文）とあり、太容梵清（?―一四二七）は「八万四千の法門、總持を以て第一となす」⁽⁵⁷⁾（原漢文）としている。因みに曹洞宗内では類似の総持尼寺（愛知県岡崎市）、総持院（兵庫県加東郡）、或いは総持庵^(延享度曹洞宗寺院本末牒)などがある。

瑩山禅師は永光寺と總持寺を兼務することになるが、後醍醐天皇から十種勅問（十種疑滯）が下され、（永光寺本は元応二年九月六日、總持本は元亨二年）その奉答が深く叡情に愜つてつぎのような倫旨を賜っている。

能州諸岳山總持禅寺者 直続曹溪之正脈 專振洞上之玄風 特依為日域無双之禅苑 補任曹洞出世之道場 宜相並南禅第一之上刹 著紫衣法服 奉祈宝祚延長者 天氣如此 仍執達如件。

元亨二年八月廿八日

^(勅修寺)
経頭

瑩山紹瑾和尚禅室⁽⁵⁸⁾

この十種勅問については当時の状況などから検討を要し、論旨についても、南禅第一の上刹に相並ぶとあるが、南禅寺が五山第一に列せられたのは建武年間であることや、宛書が和尚禅室になっていることなどから疑わざるを得な

い。

『洞谷記』元亨三年の四月八日「以吉日良辰六合目「始引五老峯地」⁽⁵⁹⁾とあり、五老峰の築造を始めているが、八月廿二日に「伝燈院 鉞立」⁽⁶⁰⁾とある。五老峰については前にも述べたように、四年前に作成した「洞谷山尽未来際置文」に、永光寺住持は五老塔主とあるから、早くから意図されていたと思われる。

また『洞谷記』によると同年十月九日には「山僧遺跡寺寺置文記」⁽⁶¹⁾を著している。これは瑩山禪師の遺跡として、洞谷山・円通院・宝応寺・光孝寺・放生寺・浄住寺・大乘寺・總持寺について述べたものである。要約して書下しにするのとおりである。

- 一 洞谷山は嗣法の人々が連続して住持興行すべき寺であるのみならず、五老の遺跡があるから、置文で誠めたように、諸山の中でもっとも崇重すべきである。
- 一 洞谷山中の円通院は瑩山今生の祖母明智優婆夷のために建立したもので、観音を安置し、檀那祖忍大師永年偃息行道の道場である。住持の門人は修理興行を加えよ。当山の太恩所である。
- 一 加州宝応寺は瑩山今生の悲母懷観大師のために建立した尼寺である。向後の房主職は明照姉公門徒の比丘尼中から、器を揀びて住持興行すべし。
- 一 光孝寺は当国最初の独住所で、門徒宿老中独住偃息すべし。令法久住、檀那の素意、僧宝断絶せしむるなかれ。放生寺は加州第三の僧所で、門徒宿老の休息する所である。祖溪都寺門徒中、宿徳を揀び倚住せしむべし。また寺院の破壊顛倒せしむるなかれ。
- 一 加州第二の遺跡である浄住寺は本願素意。清浄寄進の僧所だから、素意に任せた閑上座をして修練勤行せしむ。今無涯老門徒が相承しており、住持興行すべし。
- 一 大乘寺は先師開法の加州第一の貴寺である。門徒中尊宿が住持興行すべし。また永平一・二・三代の靈骨安置

所であるから、門徒中再興勤行すべき寺院である。

一 總持寺は当国第三の僧所である。永代伽藍興隆のため僧所としたものであるから、門徒中住持興行すべし。これら八箇寺は瑩山が修練した寺寺であるから、門徒が相承し、永代門風を守り、修練行持すべしとある。このなかで總持寺は永光寺・光孝寺について、当国（能登）第三の僧所とされ、寺位は低くかった。

また『洞谷記』によると、正中元（元亨四）年四月八日偃息の地永光寺に法堂を造立し、開堂式を挙げ降誕会を修しているが、法堂の地引人夫三百人、普請僧衆は数え切れない程で、大工は仏殿造立と同じく善真が勤めている。また施主は大乗寺檀越富樫家尚の嫡男家方である。⁽⁶²⁾同年五月十六日に「（韶）碩首座已下。僧衆二十人。總持寺僧堂を開く為出山」⁽⁶³⁾（原漢文）とあるように、總持寺僧堂を開くため、永光寺から韶碩首座以下二十人が總持寺に出向している。同二十九日「始めて僧堂を開き兩班を請す」⁽⁶⁴⁾（原漢文）とあるように、僧堂を開單し兩班を請しているが、これは總持寺に逸早く僧堂を設けて、修行道場として位置づけたものである。またそれは五老峰がある永光寺を信仰の拠点にするものでもあった。

また『洞谷記』七月七日には

總持寺住持職。讓^二与碩首座峨山老^一。著^二法衣^一。開堂。拄杖。扠子。戒策。同付囑。即日新命。始東堂相看時。

与^二興聖^{異有自作}。三尺竹篋^一。^{鉄尺定三尺二寸也}日本最初。入室竹篋。付^二授之^一。⁽⁶⁵⁾

とあるように、瑩山禪師は峨山に總持寺住持職を讓与するとともに、拄杖・扠子・戒策および竹篋などの法具を付嘱しているが、その中の竹篋は鉄尺（曲尺）三尺二寸で、嘉禎二年（一二三六）興聖寺で道元禪師が懷牂首座に秉扠させた時に用いた日本最初の入室の竹篋である。⁽⁶⁶⁾

なお瑩山禪師の退院上堂の法語と「峩山禪師請狀」を示すと、つぎのとおりである。

退院上堂法語

元亨四年七月七日、讓与総持寺住持職於(紹領)嶺峨山、上堂、卓立機前、独超物表、峨々青山、蒸々山雲、父子長年不相離、君臣道合、渾然無内外、(謝辭不録)記得、世尊拈華瞬目、迦葉破顔微笑、世尊曰、吾有正法眼藏、付属摩訶迦葉、拈曰、吾有底事如何、良久曰、頂門凸出一円相、遍界不藏新総持、(請大衆、同共礼請新命和尚)

法衣拈提、伝受語曰、

梧桐葉落秋風興、林竹自知百卉長、見渠金衣著実処、(本)太陽盈目在当堂、

桐竹綾法衣、鴿色袈裟也、(97)

峨山禪師請狀

南閭浮提大日本国能州(鳳至郡)櫛比庄諸岳山総持寺住持紹瑾(盤山)

今月七日請

当首座峨山(紹領)禪師、讓与住持職、紹続転法輪者、

右、峨山老者、予三十年同宿、公三十八年開悟、揚眉瞬目中知有己眼、破顔微笑処事弁主宰、草露菓熟、不許韜光晦迹、宗風一興、難藏祖師命脈、人天推請、初転法輪、

新命堂頭和尚容納陞座、謹疏、

元亨四年甲子七月七日

住持(紹瑾)狀請(98)

このように三十年寢食を共にして修行し、三八(二十四)歳で開悟したもつとも信頼のおける峨山に、第二代住持職をゆずり、退院上堂を行なっているが、『洞谷記』によると、七日夜十五人、八日夜十三人の受戒人があり、九日には大般若経が搬入され、十日には新命峨山以下一山の清衆により大般若が転読されたばかりでなく、委曲に般若を宣説し、十二日に永光寺に帰山している。(99)

總持寺を峨山禪師に譲り、永光寺に帰山した磐山禪師は、元亨四年(一二三四)『能州洞谷山永光禪寺行事次第』

『瑩山和尚清規』を著している^⑩。前にも触れたように、これは行事を日中・月中、年中に大別し、一日から晦日まで、正月から十二月までの諸行事を具体的に示している。とりわけ読經・念誦・祈禱など教化の要素も盛りこまれている。『禪苑清規』『備用清規』宋朝禪林の規矩、『永平清規』（典座教訓、弁道話、赴粥飯法、衆寮清規、対大己五夏闍梨法、知事清規）、天童の家風、永平の古儀、懷葬・義介・建仁僧正（栄西）の行儀、永平寺・大乘寺、或いは遍参した宝慶寺・東福寺・興国寺の諸行儀などを受容し、さらには自らの宗教体験も含め撰述している。『永平清規』が出家道の実践を中心としたもので、精神的・個人的・出世間的であるのに対し、『瑩山清規』は時代や民衆の要望に即応した在家教化の実践に配慮したもので、形式的（現実的）・集团的・対世間的とされている。

正中二年（一三二五）五月廿三日、兩願を立てているが、一願は菩提心を発し、身命を顧みず、生々世々本願の如く護持すべし。他の一願は今生悲母懷觀大姉最後遺言において領納発願し、是れ亦女流済度の菩薩なりとあるが、これは生々世々化度利生し、等正覚に至る本願とともに、女人救済の願を立てていることは極めて重要である^⑪。

また同年七月十八日、「当山条々尽未来際可勤行事」（永光寺蔵）を撰述している^⑫。これは永光寺の草創期に、寺地や寺領を寄進した檀主円通慧球尼（平氏女、祖忍尼）、性禪比丘尼、円意沙彌尼の月忌・正忌に諷經回向することを取り決めたものである。

このように女人救済の立願や、「洞谷山条々尽未来際可勤行事」置文は民衆救済のなかでも女人の救済を標榜するものである。瑩山禅師の法嗣は後述する『洞谷記』にあるように、四門人六兄弟＝明峰素哲、無涯智洪、峨山韶碩、壺庵至簡、孤峰覚明、源照珍山とされるが、『日本洞上聯燈録』には嗣法七人とあり、素哲、智洪、紹碩、至簡、源照、尼祖忍、尼慧球とある。諸伝記や諸記録には法嗣をはじめ、その名を残す道俗あわせて五十名以上が知られている。また記録にある受戒者数は城万寺七十余人、總持寺開單直後二十八人を数える。この百人余の受戒者には女人も含まれていたことは間違いない。また永光寺会下の参徒三十八名のなかには性禪尼、黙譜祖忍（寺地寄進の平氏女）、

金燈慧球尼、明照円觀尼、忍戒尼、心妙尼、心正尼、淨忍尼、円意沙弥尼の九名が含まれている。なお伝燈院建立にかかわる「伝燈院建立施主靈牌」(石川県立歴史博物館『永光寺の名宝』は第二世明峰素哲の頃)には裏面に明和九年(一七七二)夏安居に現住徳隠によつて修補立牌したとあるが、百七十六名の名前が列記されており、そのなかにも比丘尼、優婆夷、大姉が六十二名含まれている。またその外に「祖忍上座」は黙譜祖忍であろうか。

これらは前にも触れたように、時代や民衆の要望に即応した在家教化を配慮して著された『瑩山和尚清規』とともに、如何に民衆教化に努めたかがわかる。

また八月には自らの頂相に著賛し、峨山韶碩(一二七六—一三六六)に与えているが、賛文はつぎのとおりである。

身前相見身後曾親

密室投入時如何

無明業識鐵蒺藜

□枝梅花洪外之春

正中二乙仲秋日

為碩長老書之

洞谷紹瑾自賛⁷⁾

これは石川県七尾市田鶴浜町東嶺寺蔵であるが、瑩山禪師は後述するように、八月十五日夜半に示寂しているので、この頂相はその直近に描かれたもので、その時の面貌を伝えるものとして貴重である。しかし法諱の「瑾」の字体と、「自賛」とあることから瑩山禪師の親筆ではない。なお永光寺には裏地に「御開山 御袈裟」と墨書銘がある掛絡がある。現在の掛絡(絡子)とは異なり古例のものとして貴重である。

瑩山禪師の法嗣については前述したように、四門人六兄弟があつたが、なかでも明峰素哲(一二七七—一三五〇)

と峨山韶碩は二神足とされ、天性融石が応永六年（一三九九）に著した『仏祖正伝記』「四祖能州洞谷山永光寺開山紹瑾禪師」条に素哲は「老馬の路を行くが如し」、（原漢文）韶碩は「麒麟の雲を点するに似たり」⁽⁷⁴⁾（原漢文）とあり、素哲は弛みなく修行を積む努力型であるのに対し、峨山は破格の行動をとる天才肌と評しており、また後世「法は明峰、伽藍は峨山」といわれている。明峰は永光寺・大乘寺を、峨山は後述するように總持寺を拠点に教線の発展を遂げ、曹洞宗教団の全国的展開の起爆剤になった。明峰は總持寺との関係はないが、瑩山禪師との関係があるので触れることにする。

明峰素哲については佐藤秀孝『明峯素哲禪師の生涯』に極めて詳細に述べられている。素哲は富樫氏の一族として生まれ出家して初め常禪と称したが、叡山に登り受戒して、天台を中心に顕密諸宗を学び、加賀大乘寺の瑩山禪師の膝下に投じた。素哲の法諱は瑩山禪師から安名されたと伝えられている。

『洞谷記』元亨三年八月二十五日に

同廿五日。哲首座。立僧入室。伝衣竹篋同面授。捧^二法衣^一曰。永平附法伝衣。信嫡嫡師資面授来。素哲首座。相授頂戴云。瘦嶺誰言提不起。而今著得接門開。⁽⁷⁵⁾

とあり、瑩山禪師は永平附法の伝衣と竹篋を与え、立僧入室させている。また同じく『洞谷記』によると、正中二年（一三二五）七月二日、瑩山禪師は永光寺の将来を考え、法嗣中から嗣法の次第に順じ住持興行すべき、明峯・無涯・峩山・壺菴・孤峰・珍山の四門人六兄弟を定めている。⁽⁷⁶⁾

また同じく正中二年八月一日『洞谷記』に

洞谷門下僧祿御書曰。

素哲。予遺跡之僧祿也。喻如^二王道行事^一。管^二祖意^一永劫是也。

正中二年八月一日 永光紹瑾⁽⁷⁷⁾

とあり、自らの遺跡（永光寺、円通院、光孝寺、宝応寺、放生寺、浄住寺、大乘寺、總持寺）の僧祿として素哲を任じているが、これは素哲を後継者として江湖に公表し、門下の正嫡に位置づけたものである。

また『洞谷記』に

洞谷讓与御状曰。本紙。在_二加州。大乘室中_一。

附_二与洞谷全座於素哲首座。明峯兄老_一。

靈山一会座猶暖 附_二与明峰_一永興繁

洞谷綠松綠弥奥 雲居懸記水泓灣

正中二年仲秋初八日

洞谷讓附 紹瑾 在判⁷⁸

これは前に触れたように正中二年八月一日に素哲を僧祿に任命し、八日に永光寺の全座（住持座）を附与していることがわかる。

元亨四年（一二三四）七月七日、峨山韶碩に總持寺住持職を譲り、翌正中二年八月八日に永光寺を明峯素哲に附与した瑩山禪師は、前にも触れたように自らの頂相に著賛し、峨山に与え、八月十五日に遷化されるが、それについては『日本洞上聯燈錄』巻第二につきのようにある。

正中二年八月示_レ疾。八日拳_二素哲_一嘱_二院事_一。十五日夜半喚_二侍者_一。沐浴淨髮。整_レ示_レ衆。念起是病。不_レ統是業。一切善惡。都莫_二思量_一。纔涉_二思量_一。白雲万里。便書_レ偈曰。自耕自種閑田。幾度売来買去新。無_レ限靈苗繁茂処。法堂上見_二挿_レ鋤人_一。抛_レ筆而逝。火化得_二舍利_一。塔_二於大乘永光浄住總持四処_一。院曰_二。伝燈_一閱世五十八。坐四十六夏。嗣法七人。素哲、智洪、紹瑾、至間、源照、尼祖忍、尼慧球⁷⁹。

また『洞谷記』にはつぎのようにある。

正中二年。八月十五日夜半。嘱_レ門人_一曰。予化緣已尽。泥洹時至。則沐浴如_レ常。鳴_レ鐘集_レ衆曰。念起是病。不_レ統是藥。一切善惡。都莫_一思量_一。纔涉_一思量_一。白雲万里。書_レ偈曰。自耕自作閑田地。幾度売来買去新。無_レ限靈苗種熟脫。法堂上見_一插_レ鋤人_一。投_レ筆而終。闍維。収_一設利羅_一。而建_一塔寺之西北隅_一。其塔所。号_一伝燈院_一。聞_レ世五十八。坐夏四十六。敕_レ諡賜_一仏慈禪師_一。

これらによつて瑩山禪師は、八月の始めころから病にかゝり、八日には前に触れた「洞谷讓与御状」のように、素哲に永光寺住持職を譲つている。十五日夜半門人に化縁の尽きたことを告げ、何時ものように沐浴して、鐘を鳴して衆を集め、示衆して遺偈を書き寂している。闍維して永光寺の西北隅に建塔し伝燈院と号した。また先に掲げた『日本洞上聯燈錄』には大乘・永光・淨住・總持寺の四处に塔したとある。

なお示衆語の「念起是病 不統是藥」については、前に紀州興国寺無本覺心に遍參した所で触れたが、無本の『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』や『鷲峰開山法燈円明国師塔銘』の文中によつており、また遺偈の「幾度売来買去新」も、無本の師無門慧海の語録下小參にあるとされている。因みに東隆真『瑩山禪師の研究』に『大慧書』上にある「先聖云警起是病 不統是藥 不_レ怕_一念起_一唯恐_一覺遲_一」を取り上げ批判していることは注目しなければならない。

また瑩山禪師の葬送に關して「洞谷記」に「孝服可著人人次第」がある。後人が記したものであるが附記しておきたい。

孝服可著人人次第

素哲。白衣。白衫。

智洪。

白衫。白對。青白紬。

紹碩。

同上。

至簡。

同上。

尊道。

白對。白紬。

素溪。

同。

忍戒。

白青。白紬。

慧球。

同。

明照。

同上。

源照。

白青袈裟。生麻衣。

子敏。

同上。

異作。白初袈裟。生麻衣。

平交僧尼。

皆白紬。

(82)

また『本朝高僧伝』卷第二十四「能州諸嶽山總持寺沙門紹瑾伝」の末尾にある贊(正元師蛮の評価)につぎのようにある。

贊に曰く、瑾公は道元を祖述し、牂公を憲章す。宗猷号令帙然として序あり。紫袍の寵賜を膺し受し、乃祖の道場を光昭し、一家の規典を整頓し、後学の矜式と為る。仏慈禪師の如きは、洞上の中興と称すべし。⁽⁸³⁾（原漢文）なお後村上天皇は仏慈禪師、後桃園天皇は弘徳円明国師、明治天皇は常済大師を追諡している。

（9）瑩山禪師頂相

瑩山禪師の頂相は彫像と絵像がある。彫像の永光寺藏瑩山禪師頂相彫刻は、釈迦如来・観音菩薩・虚空藏菩薩・徹通義介・明峰素哲・峨山韶碩・僧形文殊菩薩・十一面観音菩薩坐像、大権修理菩薩倚像など、仏・菩薩・祖師像とともに鎌倉・南北朝期の院派仏師の作になり、伝燈院に安置されている。瑩山禪師頂相彫刻（正中二年銘石川県指定文化財）は『永光寺資料調査報告書』によると、つぎのとおりである。

松材寄木造、玉眼嵌入 漆彩色仕上 鎌倉時代

像高一・二 臂張五四 膝張七〇 膝高四五

裾張六九 膝奥五四 面長二四 面幅一五

耳張一六・五 面奥二一

本像は正面を向き、法衣に搭袈裟し、右手は膝上に構えて掌を下に向け、如意を執り、左手は膝上に構えて掌を上に出している。また左耳後には疣もあり、その風貌を忠実に表現している。なお右懸裳裏に「開山尊像明峯大和尚裏書釈迦牟尼佛五十四世法孫大乘二代洞谷開闢真像正中二年八月十五日已尅於当寺□偈（以下判読不明、あるいは遺偈が記されていたか。）」と銘文があり、当初の文字の上からなすったと思われるが、瑩山没後、永光寺二代明峰素哲の発願によりつくられたものと思われる。

また絵像には前に触れた紹瑾自贊の總持寺像と東嶺寺（石川県七尾市田鶴浜町）像がある。

總持寺像 絹本着色 八九・二×三八・六cm

元応元年（一三一九）九月八日自贊（重要文化財）

画像は余り鮮明でないが、法被を掛けた曲泉に左向きに坐し、扨子を手にした頂相通例の画面形式により描かれている。画面上部の賛により、瑩山禪師が永光寺住持として、宗風を宣揚していた五十六歳当時の寿像であることがわかる。

本像がかけている袈裟は環紐（環がついている袈裟）である。月舟宗胡（二六一八―一九六）、卍山道白（一六三六―一七一五）、天桂伝尊（二六四八―一七三五）、面山瑞方（二六八三―一七六九）らにより、古規に帰る宗統復古が進められたが、その一環として玄透即中（一七二九―一八〇七）により、環紐の袈裟は南山衣（律宗の衣）で、道元禪師の古訓に反するとして、永平寺と總持寺が対立し、寺社奉行・大名・大奥・大老までまきこみ、十二年にわたり論争している。

また本像には一般の頂相と同じように、画像の上部に賛があるが、画像よりもさらに不鮮明で、判読も困難な状態である。賛を掲げると、つぎのとおりである。

誰識庵中不死人

未搖掌握鎮烟塵

凜々威烈無等匹

三尺竹篋奪鉤輪

器宇廓落絕学天真

眉毛争到不疑地

端的眼睛又不親

皆元応元年^{己未}九月八日

洞谷 紹瑾 自賛⁽⁸⁴⁾

とある。しかし賛の字体が穏やか且つ端正で、枅目に嵌めた感があり、また運筆も全体的に伸びやかさや筆勢がなく、気迫や力感も欠いているので、親筆とはまったく異っている。とりわけ法諱紹瑾の「瑾」の字体が「瑾」になっていないから、自賛とあるのとあわせ磐山禅師の親筆ではない。

また平成九年（一九九七）、静岡県焼津市山口墨仁堂の修理報告書と、これに関連する『中興雜記』などによると、つぎようになる。

(1)画面向って右下に「永竹寺□□」とある。□□の不明分は『中興雜記』から「常住」であることがわかる。この永竹寺は「氣多神社所藏文書」にある「竹津永竹寺知行」「永竹寺分^{たき田}」「竹之永竹寺」から、竹の津、たきの田の意で、現在の羽咋市滝町であろう。またこれらには文明十三年（一四八二）、永正元年（一五〇四）、同五年、大永六年（一五二六）の年紀があるが、『^{延享度}曹洞宗寺院本末牒』にはその名を見出すことができないので、大永六年から延享度（一七四四―四八）までの間に、あるいは廃寺になったかと思われる。また後で触れる「血脈宗派」から永竹寺の開山は松巖旨淵（？―一三六三）である。

(2)画面向って左側下方の裏面に墨書銘がある。

過去の修理で右半分が切断された願主名に願主僧守杲であるが、『中興雜記』にある賛の写しから「願主僧守杲」であることがわかった。守杲については『中興雜記』の「血脈宗派」や、駒沢大学図書館蔵『日本洞上宗派図』から、道号は日屋、明峰素哲の弟子松岩旨淵の法嗣能登長松寺二世潔庵慧了の弟子で永光寺四十五世である。しかし永竹寺の世代や本像模写の時期など、その行実はまだよく不明である。

これらのことから瑩山紹瑾像は石川県羽咋市滝町にあった、松岩旨淵を開山とする明峰派永光寺末永竹寺常住であつたことがわかる。また大永六年から延享年間までの間に、あるいは廃寺になり、元和元年（一六一五）總持寺諸法度や本末制度などから、永光寺ではなく總持寺に移されたものである。なお詳細には拙稿「總持寺所蔵
重要文化財瑩山紹瑾像について」（平成二十九年三月三十一日『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第二十二号所収）を参照されたい。

東嶺寺像 絹本着色 四七・五×二六・〇cm

正中二年仲秋日 自賛（七尾市指定文化財）

画像は左向きに坐し、如意を手にした頂相通例の画面形式により描かれている。画面上部にある賛により、前にも触れたように示寂（正中二年八月十五日）直前に峨山韶碩に与えたもので、最晩年の面貌を伝えるものとして、極めて貴重である。賛はつぎのとおりである

身前相見身後曾親

密室投入時如何

無明業識鐵蒺藜

□枝梅花洪外春

正中二年己仲秋日

爲碩長老書之

洞谷紹瑾自賛⁽⁸⁵⁾

この賛の字体は親筆と比べると、全般的に異っている。とりわけ法諱紹瑾の「瑾」の字体が親筆の「瑾」になっていないことや、自賛とあることから、時期は明らかでないが、誰れかによって複写されたものである。

最後に總持寺宝物殿（現宝蔵館）蔵の「瑩山禪師野位牌」（木製・鎌倉時代）について述べる。

長四四・五 cm 幅（上部）九・二 cm（下部）八・二 cm 厚〇・八 cm

（表）

惣持開闢瑩山大禪師

（裏）

自耕自作閑田地 幾度賣來買去新

無限靈苗種熟脫 法堂上見挿鋤人

正中貳年^{乙丑}八月十五日己尅逝偈

（別紙）

惣持寺開山大和尚御涅槃之時當山

二代峨山大和尚以御真筆被書御

位牌同逝偈共隨而前住當山十三

世韶麟為世之末代愿書記之入錦袋

奉納寺庫于時

日本應永三十年開山忌謹記

招麟（花押⁸⁶）

これは別紙にあるように、峨山禪師の真筆であり、表に「惣持開闢瑩山大禪師」とあり、裏には瑩山禪師の遺偈が記されている。また別紙（添え書）には、峨山禪師の弟子無端祖環（？―一三八七）の弟子（峨山の孫弟子）の總持寺第十三世瑞巖韶麟（一三四三―？）が、錦袋に野位牌を入れ寺庫に奉納したとある。

なお位牌の起源については『禪学大辞典』に義堂周信は「位牌古無_レ有也。自_レ宋以来有_レ之」（『空華日工集』）といい、宋朝以来とし、『禪林象器箋』二四図牌門では『朱子語類』を引いて、宋朝以前に存したという。また『真俗仏事編』三祭靈部には、位牌はもと「位版」「神主」と名づけて、儒家が用いたもので、仏家がこれにならった、とある。

注記

- (1) 『洞谷記』（『曹洞宗全書』宗源下 五〇五上）参照。
- (2) 同右参照。
- (3) 『曹洞宗全書』史伝上 五九五上参照。
- (4) 『洞谷記』（『曹洞宗全書』宗源下 五〇五上）、『洞谷五祖行実』（『曹洞宗全書』史伝上 五九五下）参照。
- (5) 『洞谷記』（『曹洞宗全書』宗源下 五〇五上）参照。
- (6) 同右五一五下参照。
- (7) 『曹洞宗全書』史伝上 二四四下参照。
- (8) 岩波文庫本一三頁参照。
- (9) 同右二五二頁参照。
- (10) 同右二二頁参照。
- (11) 同右四三頁参照。
- (12) 『曹洞宗全書』史伝上 一九上参照。
- (13) 『中興雜記』、佐藤秀孝『明峰素哲禪師の生涯』六〇頁参照。
- (14) 『中興雜記』参照。
- (15) 『曹洞宗全書』史伝上 二三九上参照。
- (16) 『加能史料』鎌倉Ⅱ 三五〇頁参照。
- (17) 『曹洞宗全書』宗源下 五一五下―五一六上参照。

- (18) 同右五〇三上参照。
- (19) 同右五〇三下参照。
- (20) 同右五〇四下参照。
- (21) 同右五一〇下参照。
- (22) 同右五一上参照。
- (23) 『加能史料』鎌倉Ⅱ 四九一頁参照。
- (24) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五〇四上) 参照。
- (25) 同右五〇八下参照。
- (26) 『曹洞宗全書』清規 八二七上参照。
- (27) 同右八四〇上参照。
- (28) 同右八二九上参照。
- (29) 同右八二三上下参照。
- (30) 『続々群書類従』十二・二下 参照。
- (31) 現在の寺額は裏面の墨書銘から安永三年(一七七四)月舟宗胡筆である。
- (32) 『曹洞宗全書』宗源下 五〇四下参照。
- (33) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五一一下) 参照。
- (34) 『中興雜記』 参照。
- (35) 同右参照。
- (36) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五〇四下) 参照。
- (37) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五一七上以下) 参照。
- (38) 同右五一七下参照。
- (39) 『大正新修大藏經』一・五六四上一下参照。
- (40) 岩波文庫本一六七頁参照。
- (41) 『新修門前町史』資料編2総持寺 一二上参照。なお「寛政八年三月宝泉寺堂宇修補勸化添書願」(『新修門前町史』資料編2総持

- 寺 一四四上)に「一、御本山開基定賢律師、諸岳教寺住職之節、東_者内保村、西_者道下村、北_者和田村、南_者切留村を限、千六百石之御朱印地を以、御開山_江御讓被成候_而」(以下略)とある。
- (42) 同右一二上以下参照。
- (43) 『加能史料』鎌倉Ⅱ 一八九頁参照。なお「五院輪住の実態」で触れる伊予溪寿寺住持仏海「諸獄山輪番日鑑」(總持寺蔵)の文久三年(一八六三)四月五日の条に「今日五院前一同定賢律師_江為拜礼道下宝泉寺_江御入香資三百文ツ、持参ス則泰団子煎茶出ス」とある。これは定賢権律師が諸岡寺観音堂及び寺領・敷地を瑩山禪師に寄進し、總持寺が成立して以来、定賢律師への追恩が継続していたことを示す。
- (44) 『新修門前町史』資料編1考古古代中世 一六九下参照。
- (45) 諸岡寺は従来から桑谷内村にあり、諸岳観音堂はあるいは諸岡寺支配下の観音堂だったかも知れない。
- (46) 『新修門前町史』資料編2總持寺 一四三下以下参照。
- (47) 『新修門前町史』資料編1考古古代中世 一六七上参照。
- (48) 同右一六七下参照。
- (49) 同右一六八上下参照。
- (50) 同右一六九上下参照。
- (51) 同右一六九下参照。
- (52) 同右一七一上参照。
- (53) 同右一七一下参照。
- (54) 同右一七二上参照。
- (55) 同右一六七上参照。
- (56) 『本朝高僧伝』(『大日本仏教全書』一〇二・六七上)参照。
- (57) 同右(同右 一〇三・五四九上)参照。
- (58) 『新修門前町史』資料編2總持寺 一三上参照。
- (59) 『曹洞宗全書』宗源下 五一一下参照。
- (60) 同右五一二下参照。

- (61) 同右五一六上以下参照。
- (62) 同右五一九下以下参照。
- (63) 同右五二三下参照。
- (64) 同右。
- (65) 同右。
- (66) 『正法眼藏隨聞記』(岩波文庫本四の五、八九頁) 参照。
- (67) 『新修門前町史』資料編2 総持寺 一五上、『横浜市文化財調査報告書』第二十八輯の二 四〇頁上下参照。
- (68) 同右一四下、四三頁下以下参照。
- (69) 『曹洞宗全書』宗源下 五二三下参照。
- (70) 『年中行事』中に「元亨四年正月初三日」「二月十五日」「四月初八日」「四月十五日」「七月十五日」「八月廿八日」「九月十四日」「十月五日」「十二月八日」「十二月 日」の年紀がある。
- (71) 『洞谷記』(『曹洞宗全書』宗源下 五二四下以下) 参照。
- (72) 石川県立歴史博物館『永光寺の名宝』参照。
- (73) 『新修門前町史』資料編2 総持寺 一五下参照。
- (74) 『続曹洞宗全書』史伝 三一五下参照。
- (75) 『曹洞宗全書』宗源下 五一二下参照。
- (76) 同右五二五上・下参照。
- (77) 同右五二五下参照。
- (78) 同右参照。
- (79) 『曹洞宗全書』史伝上 二四六上参照。
- (80) 『曹洞宗全書』宗源下 五二六上参照。
- (81) 『曹洞宗全書』史伝上 二四六上参照。
- (82) 『曹洞宗全書』宗源下 五二六上参照。
- (83) 『本朝高僧伝』(『大日本仏教全書』一〇・三四二下) 参照。

- (84) 『加能史料』鎌倉Ⅱ 五〇五頁以下参照。
- (85) 同右五〇六頁以下参照。
- (86) 『横浜市文化財調査報告書』第二十八輯の二 四三頁上参照。